

十月興行

文樂座人形浄瑠璃

侍育待從
優美藏人

源平

布の
引の
籠



座樂文

しごつ四

一部 金拾五銭

仲秋十月を彩る

國粹藝術の豪華

秋いよ／＼深みて、更生の氣滿ち渡る折柄御機嫌益々お麗はしく恐悦に存じあげます。偕て、十月の文樂座人形浮瑠璃は今秋劇壇唯一の收獲たる巨家出演の名作陣を展開致します。まづ紋下津太夫が久方振りの名曲に、九月の帝都劇壇の人氣を席捲したる古靱太夫が初役『酒屋』等最も期待さるゝところこれに人形の双壁を配し病氣全快の友次郎の出演、精銳若手連の潑刺と相俟つて、その豪華に今秋劇壇を盛飾するもので御座れます、みなさま。待望久しきこの名作陣へぜひ御運び下さい。

昭和六年十月

四ッ橋

文樂座

昭和六年十月三日初日

毎日三時開幕

・御觀覽料・

- 一等椅子席 御一名—金二圓五十錢
- 二等席 御一名—金一圓三十錢
- 三等席 御一名—金七 十錢
- 一等お座席 御一名—金三 圓

一等お座席 御一名—金三 圓

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
 專用電話 七四〇八番
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へツカト廣御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土堀一通丁
 長三〇四番
 四九四番
 四九四番
 土堀(44) 土堀



大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

三味線

三味線

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

大美自來水

文樂座人形浄瑠璃 十月興行

豫・定・時・間・表

前
源 げん 平布引瀧 ぺいぬのひきのたき 百姓九郎助住家より
紅葉山の段まで

百姓九郎助住家の段

幕間 十五分間
(三時より四時卅五分まで)

音羽山の段 (四時四十五分より五時十分まで)

鳥羽離宮の段 (五時十分より六時廿五分まで)

紅葉山の段 (六時三十分より六時四十分まで)

中
艶容女舞衣 はですがたをんなまひぎぬ 酒屋の段
(六時五十五分より八時十五分まで)

幕間 十五分間

次
妹背山婦女庭訓 いもせやまをんなていきん 道行戀の小田巻
(八時三十分より九時まで)

幕間 十五分間

切
卅三間堂棟由來 げんどうむなぎのゆらい 平太郎内の段
仇討の段 (九時十五分より十時二十分まで)

仇討の段 (十時二十五分より十時三十分まで)

舞臺装置 松田種次





人形芝居について

◇人形芝居發達の事

◇文樂座なり立の事

◇人形頭説明の事

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたと御座います。其當時に、四三云ふのが傀儡を舞はせた事か『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立て命脈を維いで居たらしい御座います。浄土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたもので、所謂首掛芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃さいふものも出來た、即ち京都の目貫屋云へるが西の宮から人形舞はを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形さ此三者が綜合される事に成りまし

たのが、慶長年中、即ち徳川の始
頃です、忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋
町さか、櫓が立つて此人形芝居が繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのですが、然し舞臺などは固よ
り無く其人形さて首があるばかり、
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛騨掾が始めて其手足の工夫も
したものですか。由來此掾號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形も出來たり、野呂松のの

るま人形が出來たり、次郎三郎が
おやま人形を使つたり、殊には彼
の元祿時代になるさ大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をはじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸し、しかも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛さ云ふ名人も出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたさ云ふのが、始めは此人形を
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之が見好くないから黒幕の陰に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が袴を着け手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る
ゝ事がないといふ評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西さ東さ同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した
のですから、従つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美々しく立派やかを盡
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ゆきにするやら、
太夫も出語りをするやら、例へば人
形にしてからが先づ眼も動き、指先
が動き、享保の末には竹本座「大内
鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になるさ豊竹座「武烈天皇

儀」の佐手彦の肩を動かさしはじめる
 など、非常に發達を遂たのでありま
 す。即ち言を換れば當時名人の遣ひ
 手が輩出した次第で、中にも吉田文
 三郎の如きは享保始め竹本座の『國
 性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の出遣
 ひに片手の暗樂を示して以來さいふ
 ものは實に此人形については工夫を
 凝らしたもので、其一例を擧ぐれば
 ある『夏祭』の人形に始めて帷子衣裳
 を着せるこか、或は其遣つた一寸女
 房おたつに桔梗の帷子、黒繩子の前
 帯淺黄の綿帽子を着けさせた如き、
 今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時
 代さいふものは操盛人を極めて歌
 舞伎はあれど無いも同然、幟は林立

して其眞負は衰まじい有様であつた
 と云ひます。江戸まで矢張之と同じ
 く、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形
 舞しと此人形芝居を始めて以來、各
 派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐた
 のですが、享保に一端大阪の義太夫
 芝居も入つて來てからと云ふものは
 又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ
 御案内の同様に歌舞伎狂言などは全
 く此人形の眞似のみ演てゐたもので
 あります。前云ふ辰松も三郎兵衛も
 共に江戸へ來て其妙技を揮つた事が
 あるのです。兎も角も此人形芝居の
 全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以
 後になるに漸次本場大阪でも亦江戸
 の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大阪の新興北堀江座すらも
 大した事には成らなかつたを見るべ
 きであります。然し此間に在つても
 人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛
 かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、
 其他太夫の引拔早替などのケレン早
 業は愈々進歩を見せたので、而も操
 芝居としては前述の如く、其後は盛
 んならぬ各座の起伏消長が今日に
 至れりと云ふ次第で、それも今や獨
 り當大阪の文樂座が現存するのみで
 他には語るべきが無いのでありま
 す。さて當文樂座は百餘年の昔淡路
 の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を
 起したのに始まり、一時中絶しまし
 たのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四少橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座ざり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます。次第で御座あります。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座

の「用明天皇職人鑑」の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば「寺子屋」の源藏、「妻八」の八郎兵衛、或は「千本櫻」の銀平、「陣屋」の盛綱のごとき、なほ之の眠り目なるはあの首兵助などに使ひます。今では實盛なども之ですが然し南水漫遊などを見るに別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素齋鳴とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事がある云ひます。兎もあれ昔相函や「薄雪」の兵衛、あるひは「紙治」の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた「日本振

袖始」から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太さと呼んでゐるが聞きます。持役として「朝顔日記」の駒澤に「太十」の重次郎、その眼隅へ張を入れ其肩を引きつめる「阿古屋」の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをなさる云ひます。又所謂おやまの中にはおむす云つて之は勿論娘の事で「野崎」のお染「壺坂」のお里「妹脊山」のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城さあるのも多分のご同じものか考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



百姓九郎助住家の段

前 源平布引瀧

九郎助住家の段
 鳥羽離宮の段
 音羽山の段
 紅葉山の段

質父たる告白(三段目質盛物語)あり、紅葉の事によりて趣向を立たる三人上戸により藏人が鳥羽離宮の條りに至る(四段目)時代物の代表作であります。

(床本) 九郎助住家の段(中・次)

中 豊竹綾太夫
 豊竹富太夫

鶴澤寛太市
 鶴澤叶太郎

次 豊竹和泉太夫
 竹本長尾太夫

野歌右衛門助
 鶴澤綱右衛門

豊竹島太夫
 鶴澤芳之助

(役毎日替) 前
 豊竹つばめ太夫
 豊澤仙糸

寛延二年十一月竹本座上演が初演で並木千柳、三好松洛の合作、多田藏人行綱が布引瀧に於て平重盛を射損じて放浪し、近江の百姓九郎助の斃となつて、養女の小萬と契り後折平と稱へて木曾義賢の奴となり、其女待皆に思はれる、義賢清盛に壓迫せられて、自及するや、藏人は室葵の前を九郎助に託し駒王丸を生ましめる。駒王召捕りに來りし平家の侍齋藤實盛の述懐、瀬尾十郎が小萬の

嬰な雪が見たくば秋又こそされ鳥は白妙雪かま見れば小まん小よしと綿爲業歌に諷ふは近江路や小野原村に住馴て、つまは九郎助娘は小まん、我は小よしの霜かづき雪と霞をくり分る立綿繰のくるくさまはる三里の船よりも手廻しよいは百姓の秋の半さしられたり、のらはいつても隙だらけ主の甥矢橋の二惣太大道横に門口からハコリや精が出ます今年の綿も百目喰にくいますか、ハア、甥

人形

矢橋仁惣太 吉田玉市
 百姓九郎助 吉田玉次郎
 女房小よし 吉田玉七
 娘小まん 吉田玉米
 俸太郎吉 吉田文之助
 齋藤實盛 吉田榮三
 瀬尾十郎 吉田玉松
 葵御前 吉田覺三郎
 庄屋吉田傳之助

のさのこんせ、いつにない和はりさ
 綿挨拶、九郎助殿の留守を考へコリ
 ヤ又何ぞ種まきにか、イヤ伯父實の
 留守は知ぬが、たつた今一寸見へて
 われさは不通でこちの内へは寄付ぬ
 が、根性も直つたら、ちと頼む事か
 有る、今度都から歴々の女中をお供
 して戻つたまさかの時力に成てくれ
 ぬかさいはるゝハテ五十度や百度喧
 嘩したさて身は泣寄り頼まれませう
 さ約束した、何さ其女中さいふは、
 木曾先生義賢様の御壺、葵様さいふ
 ので有ふかのさ、うら問か、ればサ
 ア顔は青い手は眞黒ごこそ飯焚に
 孕して、連て戻つたので有ぞいの、
 ア、わつけもない、あのこんにやく
 玉見るやうな親仁に、誰がねぶらす
 もので、けふ石山参りするさいふて

よられ残らす咄聞たエ隠すまいく
 ムウすりや孫の太郎吉をつれて、綱
 持ていかれたが、ヤア、やあさは親仁
 殿は草津川へ鮎ざりにいかれたわい
 の、それに石山参りさは、まざく
 しい大きな嘘チ、奥に居る女子を、
 親父の妾さいふのも嘘、嘘さ嘘さか
 出合たからはいつそ誓文拂に打まい
 て聞そふ、コレ義賢が女房葵御前は
 お尋ね者、訴人するご金に成る、早
 先達で申上て置たれど、有様を仲間
 へ入るご、づきむ廻つても、高ぶけ
 りさせぬ、分口やらふ、が一味する
 氣はないか、チ、よふ言て下さつた
 したがマア親仁殿に、問てからエ、
 それ問てたまるものか、ソレ其こな
 たの氣を知て留守の間へ來たら骨鱸
 くはせさいふて拵へて有ぞや、アノ

鮎のか、インヤ倚棒の、イヤもふそれも伯父貴が切々くはして味覺へて居る、扱は留守にも拵て置たか、ンしかもチホ筋鐵の入たのが、ハテ念の入た事あほう律義で金儲知わる達、ンあた面倒ないんでくりよ、ハテまあ遊んで一本まいれ、イヤ又馳走に逢よりおさゝい來ましょと足早にいふた事共禿あたま歸らぬ内と出て行く。

世に連てかばる住居や憂思ひ、義賢の御臺葵御前只ならぬ身の満月かけを隠する一間より打しほれ出賜ひ、ナフ内義、いかふ鳥の鳴音も悪い、心にかゝるは小まんの事、便りもないか、音もせぬか、九郎助も太郎吉もまだ戻らずや、と有ければ、又わけもないお案じ、連合の咄の様子で

はまんはナ大方折平の後を慕ひ當途もなしにいたものでかなござりましょ、鳥鳴が悪いとおつしやれど、ありや御平産が有ふと悦び鳥、親父殿はお前へ上まするこいふて、近江の名物源五郎鮎を打にいかれました、毛網の目に風溜ると愆この息精でもお産を安ふさせますると、力付ても付られても、昔にかばる落人の御身の上ぞいたはしき、主九郎助網提戻るを太郎吉先走祖母さん大きな物がかゝつた、おれが見付た、おれが取たさ小躡して、悦ぶにぞチ、出かしやつた、アレお聞遊ばせ御運のふなをり大きなものがかゝつたさいなドレ見ませふか親仁殿なら見せふ共、イヤモ氣疎いものじや、悔りすなよ、飛も弾もせず、動もせぬ、廿

四五年もの人魚隠すが秘密と表引立よつ程けうな源五郎鮎、驚くまいご網よりもほふり出したは女の片腕娘の手共しらで悔りソリヤ見たか羅生門から奮の來るきをひ口でも伯母に見せなと仇口いふても傍へも奇す太郎吉はおかしがりテモ憶病な死だ手が何でこはいと打笑ふイヤ又氣味がよふもない、コレ親父殿コリヤまあとごから取てござつた、されば草津川の下は湖からの入込、鮎の溜の有ふと網持てかゝつた向ふへ其肘が流れてくる、孫めが見付て取てくれとせがむア、よししないものと思へど、手に持たものが好もしきに一綱くらはして引上げ握詰て居る白絹を放して見れ共中々放れぬ、いかなる者の肘ぞ用ふてもやらふし第一此絹をば

づして見たさに持て戻つた、御臺様
こそちとして腕首しつかり持て居よ
方に任せもぎ放そふ、サア持た〜
ご指付られこは〜ながら御臺さま
もに手をかけて引ごしやくれご放れ
ばこそ、ほつさあぐんで、こりやい
かぬば、いつそ手の内切わるご立を
太郎吉コレぢさまおれ放そふかご立
寄ればア、おけ〜人形の首ぬくご
は違ふ持た絹をばやぶりおるご阿れ
ご聞すいや〜あの手持た指を一
本づ〜放せば放れるご大ませ者のわ
んばくご手をかくれば忽に五つの指
は一度にひらき白絹我子へ渡せしは
肘にのこる一念の思ひはいび〜哀な
り、ふしぎながらも絹押開き見るよ
り御臺はヤア是は源氏の白旗自
家の重寶ゲスリヤ此白旗持た此手は

さいふたばかりに九郎助御臺虫が知
して女房ももしや娘の肘かさいはず
語らす三人が顔見合せて一時にほつ
ご溜息つくごばかり、かゝるおりから
平家の侍齋藤市郎實盛瀨の尾の十
郎兼氏、仁惣太が訴人に依て葵御前
を詮義の役、村の庄屋付従ひ、則
是が九郎助が所、御案内ご戸口にか
け寄打たゝき、お上よりお尋ねの事
有、明たくごつかふご聲、扱はご
九郎助コリヤ女房平家方より源氏の
胤を捜すご聞た、先御臺様を忍ばせ
よ、まさかの時は、コリヤ斯ご耳へ
吹込奥へ追やり、門口明れば兩人は
頼内へぞ入りにける、分てけにきき
瀨の尾の十郎床几にかゝりナニ九郎
助さいふは儂れが、木曾の先生義賢
が女房葵ご言ふ孕女匿ひ置たる由

是へ出せ、詮義するごこ有るご、て
つべい押を少しもひるますは思ひ
もよらぬお尋ね左様なお方此うちに
は、さいばせも立すヤアぬかすな儂
が甥、矢橋の仁惣太、此瀨の尾へ兩
度の注進通れぬ所白状ひるげ、ア、
イヤ譬甥が申ませふが、此垣生に左
様なお方毛頭おぼへござりませぬご
言放せば實盛、ア、コリヤ九郎助ご
やら悪い合點當時平家の威勢を以て
源氏の胤を胎内まで御詮義、懷妊の
葵御前匿ひ有ご現在の甥が訴人、
サ爰をよつく聞響へ源氏の胤なる共
女ならば助よご小松殿の情、それに
達て争ふご踏込で家捜し、爲になる
まい、白状ご事を分たる一言に、は
つご仕胸の思案も出さずびに及ばず
手をつかへ、成程故有て葵御前をお

匿ひ申し當月も産月いまだ女さも男
共定られぬ懐胎、御平産有迄を私に
お預け下されど願へば十郎ヤアしに
ぶさい親仁め、けう産かあす産かこ
べんくご待ふか、胎内まで搜せご
有御上意は、腹裂て見よご有仰、則
裂役は某、見分は是なる實盛、葵御
前を是へ出せ・腹裂て見て女ならば
助けてくれる、隙ごらすご早くく
アノ懐胎を腹裂さある、チ、サ清盛
公の仰成わい、お、それば余りお胴
愁、一人ならず二人のお命何卒お情
で當月中をイヤソリヤならぬ、サア
くくそこをヤアしちくごい、親
仁め奥へ踏込引すり出し、源氏の胤
を絶してくれんご、立を九郎助ヤレ
待ておじひくご手に絶り歎きごど
むる折からに俄に騒ぐ一間の内、女

房の聲さして、九郎助殿く御臺様
が、けむつゐたちやつごご呼た
ける、はつご驚かけ行を瀨の尾は頓
て引さらへヤアごごく腹裂れる
がせつなきに、産だごぬかすが合點
がいかね、誠産だが定ならば其がき
是へ連てこい、但し踏込見届うか、
何ごじや、ごふじやごせり立られ、
のつ引ならぬ手込を見るより是非な
くくも女房が錦に包み抱か、へ果
報拙き源の御行末ご斗にて、涙な
からに立出る、九郎助はせきにせき
コリヤ女房男の子なればお命ごない
エム、い、女かくごご答へす
打しほれ、詞なければ瀨の尾の十郎
ハア、男子に極つたそのがき是へご
もぎ取を實盛押へてイヤ見分は某ご
役、改めた上お渡し申さん水子これ

へご抱き取男子を女子にくるめんご
心配れご目先に瀨尾油断せぬ顔、工
面鐵面、爰ぞ絶体絶命男子成共變生
女子ご緒引まくればコハいかに、朱
に染りし女の肘はばご驚く實盛より
瀨の尾は俯り、エ是うんだかくご
興覺しあきれ果たるばかりなり、九
郎助ぬからず女房引奇、ヤイ愛な狼
藉者め、木曾の先生義賢様の御臺ご
肘産だご言れては末代までお名の穢
れなご隠しごげおらぬ、ご眞顔て呵
れば眞顔でうけ、サアわしもそふ思
ふたれご、あんまり詮義ご厳しごに
是非なふ持て出ましたご手籠葉も品
もよい手な身がばり、是も嫁ご忠義
かや、邪智深き瀨の尾の十郎にも笑
ひしてム、ハ、ム、ハ、ハ、ハ、工
んだり拵へたり、日本は扱置唐天竺

にも肘を産だ例はないはいはこのか
いの寛備めらと睨み廻せば實盛アイ
ヤ例しないとは申されずかゝるふし
ぎも世にある事、ム、コリヤ聞事、
かゝる例も何國に有ホウ申さぬまで
御存じあらん、唐土楚國の後桃容夫
人常にあつきを苦んで鐵の柱をいだ
く、其精靈宿つて鐵丸を産、陰陽師

占ふて劍に打す、干將莫邪の劍はな
り、察する所葵御前も常に積聚の愁
あつて導引鍼醫の手先を借、全快の
心通じ自然と孕るものならん、ハテ
あらそばれぬ天地の道理、今より此
所を手孕村と名づくべしとさも有そ
ふに言しより、今も其名を言傳ふ、
道の瀬の尾も言廻され、ハテ珍らし
い肘の講釋其旨清盛の御前へ参り披
露する、その腕きつと預けたぞ、チ

チ申譯は實盛が胸に有り、チ、へい
腹に肘も有からは胸に思案がなぐち
や叶はぬてハ、ハ、先へ歸つて注進
と表へ出しむきつと思案し思ひ付た
る詮義の種ムそれよ、と點頭て逸
足出して走り行く。

(床本) 九郎助住家の段(前・後)

音鎮れば葵御前、太郎吉連て立出で
給ひ、聞き及びし實盛殿、お目に掛
るは初て、段々のお情、忘れ置しと
有ければ、是は、御挨拶、某共
は源氏の家臣、新院の御謀叛より思
はずも平家に従ひ、清盛の録を喰ま
いへども、舊恩は忘れず今日の役目
迄受たも危を救はんため、然るに不
思議なは此肘矢橋の船中にて某切
落した覺有慥に此手に白旗を持つら

ん、御存じなきやと尋れば成程く
其旗も手に入しが、其切たも有者の
年恰好は、ホウ、年比は二十三四、
脊高く色白なる女、體に名は小まん
と聞より太郎助夫婦共、のふそれば
わしが娘の小まんぢや、まんぢやと
うるたえ歎けば御臺も俱に、扱それ
よと骨身に答へ太郎吉は只うるく
と譯も涙に暮ゐたる、九郎助は老の
一徹、息も涙もせぐりかけ、コレ實
盛殿、娘も肘は何科あつて切つたぞ
むごたらしい事しやつた喃この娘に
は六十に餘る親も有七ツになる子も
有ぞや、よもや盗も銜もせまい、何
誤りて何科で、サアそれ聞ふくも
せちむひか、れば女房も、そふぢや
親父殿、骸は何處に捨て有次手
にそれも聞て下されム、夫も、今比

は犬の餌食、當座に死だか生れて居るか、サア有様にいへ。いはぬか情ぢやいふて下されど夫婦が泣き出す心根を思ひ當つて實盛、叔は其方達お娘よな、聞も及ばん宗盛公、竹生島詣下向の御船、勢田、唐崎の方へ漕ぎ出す所に、矢橋の方より二十餘りの女、口に白絹を引くはえ、ぬきて手を切てさつくと、浮つ沈みつ泳ぎ来るアレ助よ、アレ殺すなと、舳叩いてあせれ共、折柄比叡の山嵐、柴舟の助もなく水に溺れる不憫さに三間櫂を投込で、念なふ御船へ助乗せ如何なるものぞ尋る内追手と見えて聲々に、其女こそ源氏方、白旗隠し持たるぞやそれ奪取れ、ばい取さ呼はる聲を聞きしより、船に居合す飛彈右衛門飛びかゝつてもぎ取らん、

イヤ渡さじと女の一念、若しや白旗平家へ渡らば末代まで源氏は埋木、女の命にかえられずと、白旗持たる肘をば海へざんぶと切落し水底へ沈しと、船を汀へこぎ戻し骸は陸へ上置しと廻り廻て此内へ白旗もる共歸りしは、親を慕ひ子を慕ひ流れ寄つたか不便やと、涙交りの物語、聞程悲しく夫婦はせき上げ道理で孫を目に返り取つてくれいとわんぱくも、虫が知らした親子の縁、三人かゝつて放さぬ白旗、心よう放したは、我子に手柄させたさか死でもそれ程可愛いか、手にさつまつた一念が物いふ事はならぬか、御霊もる共取すむり、泣より外の事ぞなき、涙おさへて太郎吉はずつて立てヤイ侍ようか、様をころしたなき、ぐつと脱た

る恨の眼、自然と實盛肝にこたへ、ホウ健氣なり遅しや母の僅はソリヤそこに、いふにかけ寄肘を抱き此手をば骸へ接て下されと、あなたへ持行きこなたへ頼み身を投げ伏て泣しづむ、かゝる歎の折も折所のもの共死骸を持込みコレは是の娘か切られて居た、肘をかたし紛失した、外はまんぞく渡しますと云ひ捨て、ぞ立歸るヤレ太郎吉よば、顔は見納め見て置けさいふにかけ寄りいだきつき、コレ喃は、様拜みます、無理もいふまいいふ事聞ふ物いふて下され、祖父様訛言して下されと、泣こむるればヤレ訛言に及ふか、こつちよりあつちから、物言ひたうて成るまいけれど此世の縁も切てはな互に詞はかばされぬ、死骸の有所を

どうぞまあ尋ねふかと思ふたれど、
なまなかに持て戻り顔見せたらたま
るまいと、そちがれる迄待つて居た
へ工男勝りな女であつたが、夫が却
つて身の怨と成つて死るか可愛やと
悔し涙に女房も嘸死しなに、こなた
やおれにいひ度い事が有つたで有ふ
太郎吉よ水汲んで櫛の花で手向てく
れ、イヤ〜おりやいやちや、か
様が物言はにや聞かぬ〜とわんば
くも夫計りが道理ぢやと、思ひやる
程いぢらし、實盛始終手を拱き、
人々の愁歎に涙ぞ浮む一工夫、思ひ
ついて傍に立寄斯く甲斐甲斐しき女
醫片腕切たり逆、即座に息も絶えま
じきか白旗を渡さじと一心腕に凝り
かたまり五臓に残る魂なし、再び肘
を接ぎ合せば靈魂歸り息する事もあ

らん、誠に彼眉間天が首三日三夜煮
られても凝たる一念恨を報ぜし例も
あり今この肘に温り有もふしぎ、又
は御旗の威徳も、切たる肘に白旗
持たせ、物は試と接ぎ合せば、我子
を慕ふ魂魄も、御旗の徳にや立歸り
息吹き返し目を開き、太郎吉何處に
ぞ、太郎吉といふに、恟りヤレ蘇生
たわ爰に居る爰に爰にぞ取り絶る、
ナウ御臺様白旗はお手に入つたか、
太郎吉にたつた一言いひたい事と
計にて今ぞあねなくなりけりヤア
コリヤ小まんやい小まん、小まんや
い、ハア可愛やな、モウそれが遺言
かいひたい事とばム、合點ぢや〜
そちが筋目の事である何を隠しませ
うぞ此者は二人が中の娘でもござり
ませぬ、堅田の浦に捨てござりまし

た、コレ御覽じて下さりませ、この
懐に持つて居ります用心合口、金
刺さいふ銘を刻りつけ、氏は平家某
の娘と書付も御座りますれば、もし
親達尋ねてこふか、取返しにもこ
ふか夫ばつかりを案じてゐて今死
なうとば存じませなんだ生き返つた
が猶思ひ、あんまりこれはどうよく
な、ほい別れと取付いて、わつ
と計りに泣き居たる俱に悲しむ葵御
前只ならぬ身にせきのぼす五臓の苦
しみ御臺の惱み實盛驚きヤアこりや
夫婦の者泣いて居る所ぞなし御臺は
産の惱みありいたはり申せと一問へ
件も間もなく用意の屏風引廻しお腰
抱やら催生やら祖父祖母が介抱し心
利いたる實盛が彼の白旗を押し立れ
ば實も源氏を守の印、若君安々御誂

生、初聲高く上げ給ふ、父義賢の稚名を直に用ひて駒王丸、後に木曾義仲と名乗り給ひし大將は、この若君の事なりし、九郎助歎も打忘れ、お生れなされたいと様の、御家來にはこの太郎吉、ムゝそれ／＼かゝる目出たい折成は實盛様御執成と願へば點きホウ幸に死たる女の忠義を思へば骸は灰になる共一心の凝りかたまりし肘、うかつには焼き捨て難し、其手を直に塚に築き太郎吉が名を今日より手塚の太郎光盛と名乗らせ、御誕生の若君木曾殿へ御奉公則是が片腕の、よい御家來と披露する、御臺は氣色を改め給ひ、尤も父は源氏なれ共、母は平家何某の娘と、太郎助の物語り一家一門廣い平家、若清盛が落し子も知れず、先づ成人し

て一つの功を立た上でさ仰に實盛ハハア御尤至極／＼先づ此所に御座有て若君御誕生と聞ては一大事義賢の御生國、信州諏訪へ立ち越御家來權ノ頭兼任に預け御成人の後再び義兵を擧げ給へ九郎助夫婦御俱さす、めに任する表の方、いつの間にかは瀨尾の十郎小柴垣より顯はれ出でヤアそりやならぬ／＼斯くあらんと思ひし故死骸を持せて窺ひ聞義賢が悴男子とあれば見遁しならず、いで請取らんと駈け入れば實盛頓て立ちふさがりア、これ／＼瀨尾貴殿も生通しにもせまい海さも山共しれぬ水子見逃しやるむ武士の情、ヤアいふな實盛扱は汝二心な平家の祿を喰ふて源氏の胤を見逃す不忠、ぐつこでもいふて見よ、じたい此のくたげつた

女めが、白旗奪ひ取つたる故平家方は夜も寝られず思へば／＼重罪人めと死骸を立蹴にはつたさ蹴飛ばしサア生れたがき奴渡せ異議に及ぶと撫切と飛んでかゝるを太郎吉が、母の譲りの九寸五分抜くより早く瀨尾が脇腹ぐつと突たる小腕の力、これはご人々驚く中ようか、様の死骸をば踏んだな蹴たなごえぐりくる／＼流石の瀨尾急所の痛手にごつかさ伏す、ヤレ出かしやつた／＼と讚そやしても夫婦共、跡の難儀を思ひやり胸轟かす計なり暫くあつて瀨尾十郎、何と葵御前是で太郎吉は駒王殿の御家來に成ふがヤ平家譜代の侍、瀨尾の十郎兼氏を討留た一つの功、成人を待す共召遣はれて下さりませ、誠に思へば一昔、部屋住の折から手廻

りの女に懐胎させ、堅田の浦へ捨たる平家の何某は、某又廻り逢ふ印に、と相添え置たるこの劍、廻りくつて我骸、幣をかけて金刺さ、成たも孫めが不便さ故、初めて御家來に、平家の縁さ嫌はれては娘が未來の迷ひさいひ、一生埋れる土百姓、七つの年から奉公せば、木曾の御内に、一さいふて二のなき家來取なし頼む實盛殿サア瀬尾も首取つて初奉公の手柄にせよと、非道に根強き侍も孫に心も亂れ焼、すらりこ抜いて我首へしつかさ當て兩手を掛、えい〜

主従三世の奇縁ぞと、仰を聞より太郎はつゝ立サア是からばおれは侍、侍ならばかゝ様の敵實盛やらぬと詰かけたたり、ホチ、適々さりながら四十に近き某が稚き汝に討れては情さ知て手柄になるまい、若君さ諸共、信濃の國諏訪へ立越、成人して義兵を擧よ其時實盛討手を乞請、古郷へ歸る錦の裡ひるゝえして討死せん、先それ迄はさらば〜いづれもさらば家來共乗かえ引けと呼ばればはつと答へて月ひたへ栗毛の駒を引出す手綱追取乗る中に何國に隠れ居たりけん矢橋の二惣太踊り出、ヤア先達て注進の褒美を無にしたそのかはり實盛も二心で駒王丸を北國へ下す段々直に注進詞番ふた争ふなと云ひ捨て、馳け出す、實盛すかさず

馬上より用意の鎌繩折かくれば首にかゝつてきり〜引寄せ引上り、攢み適儻は日本一の大欲無道の曲者めと鞍の前輪に押付けて首かき切つて捨てけり其後手塚の太郎母も筐の小相口金刺取つて腰にばつ込み綿繰馬にひらりこ乗ヤア〜實盛かか様殺して逃るか、いぬか、もふおれか名は手塚の太郎コリヤこの金刺の光盛なり逝す愛で勝負々々と呼はつたりム、出かいた〜蛇は一寸にして其氣を得る自然と備はる軍の廣言、成人して母の怨、顔見覺えて恨を晴らせ、イヤ〜申孫めが大きい成る中には其許様は顔に皺、髪は白髪、其顔變る、ム、成程其時こそ髪を墨に染め若やいで勝負を遂げん坂東聲の首取らば池の溜りで洗ふて

音羽山の段

竹本文字太夫

鶴澤 叶

人形

谷川冷水 吉田玉徳

松並檢校 吉田光之助

多田藏人行綱 吉田榮三

難波六郎 吉田玉松

見よ軍の場所北國篠原、加賀の國にて見參見參、實に其時に此若き恩を思ふて討すまい、生き永らへて居つたらば、この親父めが御旗持兵糧突は私役、首切役は此の手塚ホウム、互に馬上でむんず組み兩馬間に落る共、老武者の悲しさは軍に仕つかれ風にちやめる古木の力もおれん其時手塚合點く終に首をまかき落され篠原の土こなる共名は北國の街に上んさらばく引別れ歸るや駒の染手綱隠なかりし弓取りの名は末代に有明の月洩る家を跡になし駒を早めて立歸る。

(床本) 音羽山の段

松風の音に聞へし音羽山、地主の櫻も秋來れば問ふ人もなく埋れし多田

の藏人行綱は人目を忍ぶ深編笠、胸に孫吳が兵書をいだき浪人めげども二腰は昔床しき其勿体しづくこ歩み寄梢を詠め立留り、ム、最早清水寺へ來りしよな、大悲の弓の力を頼むも大惡不道の清盛を討取り源氏の御代にひるがへし震蕩を安んじ奉らんこ、心は矢猛にはやれ共、忍び入るべき手段もなく一方ならぬ警衛に却て我を詮義するこちまたの風聞清和源氏の嫡流たる多田の藏人行綱が身のなるはてか口惜やこくく弓矢八幡も見放し賜ふか淺ましやこ拳を握り齒をかみしめ、無念涙にくれ居しわ、ハア、我ながら不覺の涙妻の待宵娘の小櫻、宮仕へに入り込ませしも手引をさせん兼ての手段、白川の御君をうばい出さん工夫は、

鳥羽離宮の段

切 竹本津太夫

鶴澤綱 造

人形

- 多田藏人行綱 吉田榮三
- 娘 小 櫻 吉田榮三郎
- 仕丁平次 吉田玉松
- 仕丁又五郎 吉田玉七
- 仕丁藤作 桐竹政龜
- 紅葉の局 吉田覺三郎
- 若葉の局 吉田利男

此世に心残らぬ必ず本望達してたべ
 南無阿彌陀佛彌陀佛と唱ふる聲もよ
 ばり果て闇から闇の死出の旅、つい
 にはかなく成にけり、勇氣たゆまぬ
 行綱も悲歎の涙絶はかれて、せめて
 心の野邊送りと死骸をかたへの松の
 根にこむらふ露や玉簾の鳥羽の離宮
 へ急がんさ歩む弓手の草叢より、ぬ
 つと出たる難波の六郎指出すがんご
 う行綱は道引違へ行んさす、鏑を取
 つて引戻せば腰をひれつて蹴上るむ
 んどう真くらがり闇ばあやなし行綱
 は後をくらし逸散に鳥羽の御殿へ

(床本) 鳥羽離宮の段

きのふ迄秋の雲井の御住居もけふは
 淋しき冬枯の空にしぐるゝ一曇り、
 世を浮雲にへだてられ鳥羽の離宮の

配所の軒君が叡慮に随ふは庭の楓葉
 ばかりなりうきつれくの官女達一
 つ所により集り、ノウ若葉局 君様
 にもいつもの御殿におはしまさば、
 紅葉の御遊のお能のま、俱にこちら
 も樂しむもの、此北殿へ押し籠まは
 きつい殺生、わんばくなく清盛様の
 斗ひにて、御宮仕へする者は漸々仕
 丁さこちらばかり、ほんの裸百官百
 司囁御不自由に有ふのふ、チ、何よ
 りの御不自由は此程よりの遠ざかり
 夜の御殿へ入御成て今宵は召すか明
 日の夜は誰がたのまれど、寢すのば
 ん、鳥が笑ふ鳥かなぶる、あゝもど
 かしと打笑ひ暫しの憂さを晴らしけ
 り。掖門の官人兩手をつき、重盛公
 より叡慮を慰んさ松波掬校出仕なり
 と訴ふる間もなく、あら炭をのんで
 啞さなり身にうるしせし唐土の豫讓

が例しひく杖や胸に一物庭先へ人目
 くらます行綱を探りく〜高欄を便
 りに登る廣縁先、たそお取次下され
 よ、さいふに紅葉が差よつてノフ松
 波掬校さばそなたか冬ざれの厭ひも
 なく太儀〜幸ひ火鉢も爰に有る、
 あたらつしやれさ、わるざれに、か
 たへにそつと取退ればハ、〜、たつ
 た今まで爰に有た火鉢、脇へ直すこ
 はコリヤ又意地のわるい事なされま
 すの、テモがなれ、そんなら是はこ
 有合す紅葉の枝をさし付けばム、見
 る人もなくてちりぬる奥山の、もみ
 ぢば夜の錦なりけりでござりませふ
 かな、ほんに奇妙な掬校殿、帝様の
 よいお慰み、此通り奏聞せん、ちつ
 この間そこにご打つて次の御殿へ
 入にけるア、申し、どうぞ私も一所

に申〜モ是は扱胸怒なア、又退屈
 さすので有ふ、御所勤めはヤモ是に
 こまる、ごつぶやく折から小櫻はし
 らやかに一間を立ち出、掬校殿召ま
 る、イザこなたへご何氣なふ顔つく
 く〜ご打眺めヤアお前はご、様ア、
 コリヤシイ密に〜ご傍見まはしに
 ちり寄、ヤレ小櫻か、チ、久しやの
 ふ、兼て申合し此度の大望年端も行
 ぬに父にまさりし大役、チミヤ出か
 したヤういやつ、シテ母の待宵は、
 無事に暮してお居やるか、いづれの
 御殿に勤めてゐるぞぞ問はれて娘は
 ないじやくり、イ、エおか、殿は清
 盛の御殿に宮仕へして過し十日の歌
 合せの夜に、只一討されらひ寄りム
 シテ〜ごふした、サア見付けら
 れて口惜しや、敵きの手にかいつて

はかない御最後、ホイ、はつごばか
 りに行綱は暫し詞もなかりけり、小
 櫻は涙を押へおか、様の死しやんし
 た様子も此御殿で聞たばかり、もふ
 是からは杖さも柱さも思ふは父上お
 ひとり一人もしおか、様の様に見付られひ
 よんなお別れをせうかご、それが悲
 しうござります、言付けられた一々
 は私も首尾よふ仕置せませふ、見咎
 られぬ中早ふ逝で下さりませご、稚
 心の孝行心、不便ご思へご聲はげま
 し、エ、何を心弱い氣遣ひするな、
 我も多田の藏人行綱、ウヌ清盛め、
 主君の仇妻の敵、今宵の内に思ひし
 らさん、其方にも悦ばせる、君の爲
 に相果し女房は手柄者、エ、泣て返
 るか、サ悔んで戻るか、泣な、アイ
 泣な、アイ、エ、なくなご立派にい

へど心には遠いもせの別れの涙、袖
に時雨の晴間なき、未練と心取直し
其性根では、心元ない、コリヤ親に
不覺を取するな、アイよふ心得てお
りまする、シテ君の御座は、アイア
ノ廊下續の見付の御殿、直宿の武士
は仕丁ばかりでござります、フム、
よし／＼と、ひそ／＼と咄しの折も折
楓の木の間、に聞ゆる人音けざられま
じと空まぼけお肩様、左様なら御案
内を頼みます、サア／＼とござれと手
を取て奥の御殿へ、入相の木々の梢
も哀れそふ峰に響し淋しさを爰にこ
たふる塵塚や紅葉の落葉掃寄／＼、
ほうきてん手に仕丁共扱もやさしや
ナ盤の虫ばよへ忍ぶ心か火を燈すへ
ハリヤサ、コリヤサ、ヨチイヤサ、
ヤコレ平次おいらに掃除ふり向けて

悪いぞよく、ア、イヤ／＼おれも
漸々今仕廻ふたが余り寒さにふるひ
上つて居るわい、チ、ソリヤこちら
も同じ事じや、何と一あたりあたる
かい、チ、幸の此楓枝ぶち折つて焚
火にせう、と心なき仕丁共盛りの枝
葉へし折、踏折落花狼藉、木の葉か
き寄すり火打ちほくちにうつせば秋
の山烈しき嵐に吹付けられ感陽宮の煙
の中サア／＼藤作来てあたれ、と足
投げ出し尻もつ立エ、心地よい／＼
は神國じや／＼、ハ、ハ、ハ、是で惣
身があたまり、イヤモとんと寒さ
を忘れたわいと暖氣を衛士の篝火な
らで三人焚火に餘念なく鼻唄交りの
折こそあれ、一間を出る若葉の局、
それを見るより打驚き、イヤモそこ
な衆、大事の紅葉を焚火にするとは

マめつそふな微聞に達したら大体で
は有まいぞや、我君様へこの通り申
上ん、とひ捨て局は奥へ入る、後
に悔りはいもう仕丁共焚火を打消し
踏消して、うるたへ騒ぐ其所へ紅葉
の局は白銀の銚子土器たづさへて、
しとやかに立出、ノウ仕丁共、御寵
愛の紅葉を折つて焚火せしは狼藉に
似て狼藉にあらず林間に酒を暖め紅
葉を焚さいふ詩の心、下々には心有
者共と歡感有、寒夜には御衣を脱し
帝も有り、嘸寒からんと君より九献
を下さる、皆有難ふ思やいの、と
聞より三人一同に蘇生たる心地にて
おづ／＼と這出コレハ／＼科を御赦
しさへ有るに勿体ない／＼我々に御
酒下さるはナア平次、又五郎、イ
ヤモ有難いと申ませうか忝いと申ま

多田の藏人行綱と言ふがな、イーエ
エー隠しなげんないな、アノ源氏方
で有ふがの、イーエエー是程事を分
ていふに隠しあがる胸ざりめらうサ
ア斯言出したら金輪際うぬが親の假
名實名聞き抜かにや置ぬのじや、こ
早れちかゝる腹立上戸、藤作は高笑
ひハハハハハハハハハハハハハハハ
又平次がしかつべらしい顔をして
ホハハハハハハハハハハハハハハハ
さなげない、たしなめハハハハハ
ヤイハハハハハハハハハハハハハハハ
合點が行ぬつらまへ、其故詮議す
るのかなにおおかしいぞい、ハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ
その顔がハハハハハハハハハハハハハ
やがるなくおかしうないぞ、サア
女らめ、有様にぬかさにやウヌしめ

殺すぞよ、さかきにかゝつて罵れば
こらへハハハハハハハハハハハハハハハ
むせ返り、エー無得心な、平次もい
かに忠義じやさて白状せればしめ殺
すまは、ソリヤ餘り胸怒じや、ハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
愛へま手を取て涙ながらにひざ摺寄
コレ平次がどの様に言はふぞ、何ん
にもこまる事はなげんないぞ、シヨウ可
愛そふに、おろハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ふ聞きや、お前のまゝ様の名を言は
ぬまな痛いめにあればならぬ程に
アノ誰も聞かぬやうにちいさい聲で
わしにそつと言ふて聞しや、ヤヤ、
イーヤ、そんな事はしらぬわいの、
チハハハハハハハハハハハハハハハハハ
尤じやハハハハハハハハハハハハハハハ

アハハハハハハハハハハハハハハハハハ
るわいハハハハハハハハハハハハハハハ
有難いはいハハハハハハハハハハハハハ
しいぞハハハハハハハハハハハハハハハ
まだるい其小びつちよめ、愛へ引づ
つてこいやい、ハテ其様にむごふせ
いでも詮議はなる事じやはいの、ヨ
何じや又泣かハハハハハハハハハハハ
れ又も有ものじやな、ハハハハハハハ
りや又わが笑ふので猶悲しいハハハ
ま、黐の様な涙をこぼし、しやくり
上ればハハハハハハハハハハハハハハハ
らぬ、ハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ひ上戸、泣上戸、中に平次がむつこ
顔エー、コリヤ何か、わいらは泣た
り笑ふたり、源氏の餘類を詮議する
を、わりや邪魔さらすかい、ハハハ

る命は惜まれど、たつた一言さゝ様

に、暇乞も仕たふござります、おか

い様の死目にも得あはず、せめて一

人のささま様に、さつくりと逢て死

い、エゝなつかしい親子は一世のわ

かれさや此世で逢れば未来でもあふ

事ならぬ悲しさを推量してたべ檢校

様、あいたいわいのさばかりにて親

は目さきにありながら、いはず語ら

ず暇乞、枯野の原の雛うづら音を泣

き枯らす風情なり。何ぞ御坊聞かれ

たか、油虫程なごまをして、テモマ

アしぶさい奴じやごんせぬかいの、

いかさま片意地な生れ性、それ程の

責にあふても親の詞をきつと守り、

我氏素姓を明さぬさは、チ、しほら

しい、ヤムハ、マよふいひ含め

たものじやなア、ご紛らかす、ハ、

ハ、ハ、ハ、ヤそろく詮議の糸口が

見へるはい、ヤ其糸口で思ひ出した

イヤナニ御坊おりやこなたにちご無

心が有ム、手前に無心さはな、イヤ

外でもない大内に奉公はすれど終に

其琵琶をやらを聞いた事がない、何ぞ

爰でちよつと弾て聞さんせぬか、ム

、サア、それは弾れまい、是ばか

りは機嫌らしう弾れぬ苦じやテ、へ

、ソレ琵琶は女唄氏の作にして、

廉妾夫より日の本に傳る十二の律管

に五音をわかり、内心に愁有ば、音

律に現はるゝ四筋の糸の善悪邪正ヤ

うかつにはイヤサ弾れまい、おれも

望かけたからは琵琶がならずば、チ

、いつそ爰へおりて此小せがれの詮

議して下んせぬか、ハレやくたいも

ない琵琶はまだしも手馴し業、胴怨

なげに其詮議が、ごふなるもの、サ

アそんなら一曲聞してくれるか、サ

アそれは、但し詮議してくれるか、

ム、ウその儀は、琵琶をひくか、詮議

をするか、サア、御坊返

事はマ何じやいのと否と言さぬ詞の

鏝、打付けに望一物松波が、胸に

漣立騒ぐ、琵琶の湖水のてうし口

亂るゝ心しらせまじ、悟られまじと

是非なくも手に取上る琵琶の音の、
 しらべもしごる恩愛の血筋四筋の糸
 筋に、いざや諷はん是さても浮世は
 夢の現さやさは有恩愛の中心さ
 まつて、腸を斷魂をうごかさずさ
 いふ事なし、ア、琴や三味線さは違
 て、イヤ又格別な物じやナ、ハ、ハ、
 ドレ此間に又一責サアめらうめ、有
 様にぬかせい、イヤしらぬ、ヤぬか
 さにや斯さ繩先取、楢へぐつさ引上
 ぐれば小腕も抜る四苦八苦アレく
 術ないはいのふく彼芝蘭の契りの
 たもさにはかばれをしようたんの炎に
 こかせ共、紅蓮の水さくる事なし、
 我子は目前地獄の責、揚つおろしつ

幾度か、紅葉の古木は劔の山、取亂
 さじさくひしはる、胸は七重の厚氷
 さけて流る、行綱も涙せきくる瀧津
 涙、膝に淵なすばかりなり、歎きの
 油斷見濟して箆に仕込しあら身の刀
 ぬくよこ見へし稻妻や、行綱覺悟さ
 切込平次、心得たりと身をかはし我
 子を小脇にかい込でぬけつくりつ
 飛鳥の如く刀たぐつて脾腹を一當う
 んさたちろく其隙に奥庭さしてかけ
 入たり、平次は無念の大音上、ヤア
 く松波檢校こそ源氏の殘黨多田の
 藏人行綱に相違なき條難波の六郎見
 届けたりと呼はる間もなく越中、上
 總さくより是にさ以前の仕丁、用意

の胸丸小手すねあて庭上にかけてつ
 ればヤア、旁々、多田の藏人行綱
 はもみちの林へ逃げ込しぞ、我は帝
 を守護の役、御油斷あるなと制する
 六郎聞よりかけ出す二人の勇士、人
 數をくばる御殿の騷動、上を下へこ

紅葉山の段

(床本) 紅葉山の段

多田藏人行綱 竹本貴鳳太夫

平 重盛卿 竹本文太夫

難波六郎 竹本長子太夫

越中次郎 竹本陸路太夫

上總五郎 竹本喜久太夫

野澤八助

人形

多田藏人行綱 吉田榮三

平 重盛卿 吉田文作

越中次郎 吉田玉七

上總五郎 桐竹政龜

難波六郎 吉田玉松

取巻大ぜい

かへしけり鳥羽の離宮の坪の内紅葉の園も忽に修羅の巷の責鼓、死物の狂に行綱は、むらがる多勢を切り立／＼げしき手並に強者共むら／＼はつと逃散たり、行綱劔の血を一口大息はつと、かゝる折からかしこより主は誰共白羽の矢、羽響渡つて行綱が、弓手の袖を縫たりける、驚きながらかなぐり捨てや何やつなれば名乗もかけず、遠矢にかけしは卑怯至極と呼ばるこなたに聲高く、ヤア多田藏人行綱、小松内大臣重盛對面せんと呼ばつて立出賜ふ重盛卿ゆう

／＼ぜんたる其形相、後に續て難波越中、上總も共に引そうたり、重盛勇美の御聲高きいかに行綱我こゝめいの術は得ず共、汝を射るは安かりなん、があたり勇士を矢先にかけるは武道の情なきに似たり態これらひをはづしたる其矢をさくさ改め見よ、いつぞや、布引瀧の邊にて曲者む某へ射かけしは少花女より源家に傳はる水破、兵破の其一つ、扱は藏人行綱其時より知りつれども、わざと命を助け返し、今こそ汝へサ返信せり、重盛斯て有中は、君の玉体氣遣なし、まづ一端は此場を立退味方を集め花々しく戦場の旗上げせ

よ、サいかにかゝる仰の中、上總の
五郎・難波、越中、詞を揃へ、其時
こそは我々が君の御馬の眞先にて、
分取功名譽を現はし、汝の首も三人
が中間へうけ取覺悟せよ、シヤうち
虫めらがほざいたり行綱が必死の太
刀先重盛始めうね等が首さらへ落す
は安けれども、先づ今日は赦し置き
やがて白旗懸へし、なまくら武士の
眠りを覺さん、其時こそは清盛始め
汝の首も引さげんかんれんせよと言
はせも果すホーホー、いゝござかし
き汝の廣言、源氏に孫吳の術有れば
我又張良韓信が奥儀を盡して雌雄を
決せん、後な見せぞ行綱さ、はげし
き其將ひるまぬ勇將、にらみ別るゝ
敵味方、運は天下の晴勝負、紅染る
紅葉葉は時知り顔の赤旗や空に飄飄
白雲は、頓て靡す白旗の源氏と平家
物語り世々に傳へて残しけり。

よ、サいかにかゝる仰の中、上總の
五郎・難波、越中、詞を揃へ、其時
こそは我々が君の御馬の眞先にて、
分取功名譽を現はし、汝の首も三人
が中間へうけ取覺悟せよ、シヤうち
虫めらがほざいたり行綱が必死の太
刀先重盛始めうね等が首さらへ落す
は安けれども、先づ今日は赦し置き
やがて白旗懸へし、なまくら武士の
眠りを覺さん、其時こそは清盛始め
汝の首も引さげんかんれんせよと言
はせも果すホーホー、いゝござかし
き汝の廣言、源氏に孫吳の術有れば
我又張良韓信が奥儀を盡して雌雄を
決せん、後な見せぞ行綱さ、はげし



酒屋の段

艶容女舞衣

酒屋の段

中 豊竹鳥太夫
 豊竹芳之助
 鶴澤猿太郎
 豊竹古靱太夫
 鶴澤清六
 野澤勝芳
 切 豊竹古靱太夫
 琴 野澤勝芳

人形

丁 雅長太
 半兵衛房
 美濃屋三勝
 五 人組衛
 親 宗岸組
 嫁 園
 茜 屋
 娘 半七

吉田玉昇
 吉田傳之助
 吉田文作
 吉田門造
 吉田利男
 吉田玉次郎
 吉田文五郎
 吉田玉市
 吉田文枝

今ごろは半七さんのさばりて知られてある世話物の粹であります。上中下三巻からなつてあますが酒屋は下の巻の上塩町の段の切になつてあます。書下しは安永元年十二月の豊竹座で、竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七の合作です。この作の以前に寶永年間と同じ豊竹座で『笠屋三勝廿五回忌』と名題して上場されてあます。この段の内容を申し上げます。茜屋といふ酒屋の半七がお園といふ女房が有るのにもかへらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ藝子に迷ひ遂に人殺しまでする。お園の父宗岸

は舞の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したも再び考へるころがあつて茜屋へ復歸させやうとするも、半七の親の半兵衛が拒む處から事件が展開されて、お園の貞節や、捨兒のお通の守袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面もそれからそれへそ續く名作であります。

(床本) 酒屋の段 (中)

古郷は大和五條に名のみして今は浪花の上塩町、格子造りも小つくり三輪の山本なられ共杉立軒の酒林味淋、白酒焼酎の看板もからい渡世なり賣場に居眠る丁稚の長太酒壺であたまコツツリアイター、エーじいつじやい人のあたまをたゝきをつ

たはごいつじやごいつアたれも、いたのじやなかつた、おれがでに打たのじやエへ、ヨウ何じや、又弾は、隣須賀市が稽古じやそふな何ぞ面白い事をうたへばよいかな、
 M かはいらしい前髪をあいそもこつそり坊様にせう事もなきうきふしのこ、ばつかりに日はてるまいし、ハア萬年草をやらかしおるコリヤ面白よふく、味い事く、ごふぞ長ふ頼みますぞへと体を横に寝ばらばい餘念たはいも納戸より立出る此家の女房ヤイ長太よ其なりは何じや、今日は親父殿を代官所からお召で何事が起つた事と内でさやかか案じて居るに其氣も付かぬたわけ者エ、たしなみをれと呵られて俄にしよげりましくしと水ばなすゝるばかりなり、

早や日も西に片影を歩む姿は一風有二つか三つの子を抱き酒やのれん押明ておじやまながら酒を少々下きりませと内へは入れれば何じや酒くれへ、ンこちの内にやる酒はないは通りやく、イヤ、私は物もらひでは御座んせぬ、よい酒が一升買たう御座んすと言に女房立寄てエ、又しても阿呆奴が廬相ばつかりぬかしおるお教しなされて下さりませ、そしてよい酒とおつしやるは名酒でもあげませふか、アイ遣ひ物に致しますのじや程に随分よいの内方の塗樽に一升入て下さりませテ、お遣ひ物になさるなら相生がよからふさ、ほこの香よい程らいに詰樽の口にべつた

り銚酒の事付手早に張て差出せばチ、相生は芽出度銚酒價はそこへ宜しふさ、おあし取出し差出し、近頃わりなき事ながら内方のお衆に此樽持せて、一寸そこ迄やまわかつて下さりませぬか、チ、それは何よりお安い事コリヤ、長太よ此女中様に付て居て樽の明た時取りに行く様に先様をよふ覺えて戻らふぞや、ご迄なりと連てお出でなされませテ、それはマア、お嬉しや、お禮は戻りに申ませふ、こなさんいかい太儀ぢやの、ご挨拶さりん、ぬり樽を長太に持せて出て行く引違て主半兵衛老の五調氣はいらくら急ぐ足元我家の軒跡に年寄五人組打連伴ひ立歸ればチ、親父殿戻らしやつたか、チ、コ

レハ〜お年寄様ごなたも〜いか
い御苦勞思ひがけない代官所のお召
故何事が起つたか今朝からわしは
案じついで氣遣な事じやござらぬか
ア〜イヤ〜お内儀さして氣遣な事
じやござらぬ高むこの半七が山の
口で人殺した、ア〜イヤ〜申お宿
老様半七が人殺し、ム〜サア、忤め
が一頃さば違ふて、モ、ぞけ出した
故の勘當ムサ〜其挨拶は忤いけ
れど先其分になされて、ナア、何も
仰有て下さりませすな、ヤコレ、女房
共定めて案じて居やつたであるが何
も氣遣な事じやなかつたが皆様は無
御退屈御酒でも爛して上ましやご夫
が詞に悦ぶ女房それはマア〜目出
度い事身に覺ばなけれ共、時の災難

でどんな事か起るか案じた程は悦
ばぬ皆様の草臥休め看はなくさ御酒
一つさ立を留めてア〜コレお内儀イ
ヤモよしにさつしやれ。下宿で支度
して酒もたんご呑んで居れどトツト
モ理に入つたかして酔も出ぬア〜氣
の毒な事では有さ宿老の投首、何ご
やら様子有げの折柄に上の町からお
い〜と泣て戻る阿呆の長太片手に
酒樽片手に抱く稚子も俱に泣く我家
の内エ、又阿呆めが余所の子にせぶ
らかされたナ、エ、よい年をして何
のほへさまたしなみおれさ叱られて
イーエこちやせぶらかされやせぬけ
れどなさつきの女おれを辨天様の
中へつれて往てちよつこ其所まで往
てくる程に此子をちよつこの間抱て居

てくれさ言ふてナそしてから、何處
へいたやら、何ぼ待ても戻らぬによ
つてナ金比羅様や八幡様や生玉の中
をあつちへいたり、こつちへいたり
尋れる中に此子が泣によつて、それ
でおれも悲しいワア〜イヤ〜
何をぬかすやら、それはおのれが阿
呆じやによつてやつぱり辨天の中に
待て居ればよい事をエ〜定めしこゝ
へ尋れて見へるであるさ、泣子をす
かし抱取りチ〜よい子じや姫御前の
子じやそふなさ長太が提し樽打なが
めハア替つた書付コレ見やしやれ、
親父殿さ樽さし寄ればハテ此廣い大
阪同じ名もあらいでばさ言ひつゝ立
寄肩にしは、ム〜進上、上鹽町馬場
先にて茜屋半兵衛馬場先で茜屋半兵

衛さいふはこちの事じや、見りやこちの塗樽コリヤ様子でも有事かサイノ様子と言はさつきに見知らぬ女中が酒買ひに来てアノ長太を雇ふて連れていかれたが其樽に此書付ヤア何じや見知らぬ女中が酒買ひに来てサイノ、其時何の譯も言ずアノ阿呆を雇ふて、ム、ハテ、めんよふな、さふしぎに立寄五人組こらがお宿老の分別所と、言ふても詰る塗樽の禿たあたまをかたむけり、半兵衛膝を丁と打ち、ム、よめた、コリヤ捨子じやはい、ヤア捨子とは何を證據ハテこちの内て買ふた酒に進上、茜屋半兵衛様と書付其子を阿呆に抱して何處やら行方の知ぬは疑もない捨子此半兵衛を見込養育頼む印の此酒

何ぞそふじや有まいか、ム、成程言はつしやればそんな物、何のよしみもない人が酒くれふ筈がない是が捨子なら何ぞまあ利口な仕様じやござりませぬか、ソレイノみかん籠もいらす、イヤモ新らしい捨子の趣向、ヤコイツワ一番はやりませふはいの、シタがコリヤ捨子のつゝもたせじやないかや、ハテ何ぞ致しませふ、こふ突附られた事じやもの養ふてやらざなりませまい、おゝそれはいかい後生じやが其かわり其子について連論妨ある時は何時でも町が證人じや、サ、何ぞ皆の衆、是をばねにモウいのふじや有まいか、イカニモ左様と立上れば半兵衛夫婦つどく今日御苦勞御世話の禮、

何やら物を言たげにふり向宿老を目でさめ稚子いだきおぢうばは一間へ。
 (床本) 酒屋の段 (切)
 M こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたり盛を獨寝の、お園を連て爺親が、世間構はぬ十徳に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、主の妻は灯をこもし、表を締こ急々こ、出合頭に。詞ホ、是はく宗岸様、其處に居やるはお園じやないか。アノ母様、お替りもござりませぬかご、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越兼ねる。宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿お宿にかこ、娘を連れて打通れば。妻

は門の戸引立て、サア〜先づお上り成されませと、奥底も無き詞の中夫と聞くより半兵衛が、一間を出る澁々顔。詞娘を連れて行かれたからは此方の内に用は無い筈、何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒詞イヤもふ人様に追従云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さいませ、此間は嫁女の歸つて居られませぬ、いかにお世話でござりませぬナンノ〜、半兵衛殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と、無理に引立行つたのは、娘に引を取らずまい爲儂む氣迷ひ、夫から思案爲るに付け、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれぬか如何爲ふ

が、男の方から追出すまで、取戻すに云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひ、と悔んでも跡の祭り園めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸まれば、若や病が起らぬか、見て居る親の心は聞、儂も天満に年古ふ住んであれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りば詫れば成らぬと、年寄の顔押拭ふて來ました。何彼のことは了簡して、今までの通り嫁じやと思ふて下され、これ頼みます御夫婦と謝り入つたる挨拶に、お園もうぢぢ、手を支へ。爺様の一徹で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御さ極まつた半七様に嫌はれるは皆私共不調法、鈍に生れた此身の科、詞今から随分お氣に入る様に致しませう程に

猶且元の嫁娘と、仰しやつて下さりませ、お二人様と、跡は詞も涙なり詞オ、何のマア、其方さへ其心なら此方は變らぬ嫁姑。ノウ親仁殿、そぢぢや無いか。イヤそうぢぢやない。昔唐に例が有る。太公望とやらいふ人の妻、夫に隙取り月日を經て、訛言に來りし時、鉢の水を大地に覆させ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦に成らんよ、太公望が云はれたよ、且外講釋で聞いて來た、夫と丁度同じ事、此方の方から無理隙取つて、今更嫁と思へとは、何時まで云つても返らぬ事、口詞叩かずと、早う連て退しやれ〜と、膠もしや〜りも納戸口、顔も背けてゐたりける。詞オ其腹立は尤も〜、む重々不調

法は、此天窓に免じ了簡して、何卒嫁に。否でござる、忤めも勘當したれば、嫁ま云ふべき者もない筈。サア夫も慇しめの爲當座の勘當、イヤ當座でない、七生までの勘當ぢや。△、其又七生まで勘當した半七が代りに、此方は何で繩に掛つた。ヤアサア半七とは親でも子でも無い此方、今日代官所で何の爲に、縛られて戻らしやつたさ、思ひも寄らぬ宗岸が、詞に悔り驚く、女房、嫁も俱々立寄つて、肌押脱せば半兵衛も、小手を緩めし羽搔縮。ノウ情無や何事と、嫁はうるゝ、女房も取付き歎けば宗岸が。詞イヤ未だ驚くことある、筈の半七は人殺し、お尋ね者になつたわいのさ、聞くより二人は又悔り。夫は何故如何した譯、様

子を聞かしてコレ、半兵衛殿ご聞へども更に返答は差俯いて詞なし。宗岸涙の目をしげたまき 詞一昨日の晩山の口で、善右衛門を殺したは茜屋の半七さ、噂を聞いた時は、驚くまいか悔りせまいか、膝も腰も抜果しむ、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合せと思ふたは他人の了簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子と思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儂も娘を取戻したら、親にかゝる首纏も無い、能い事爲たご世間から譽める人も有らうか、親ご成り

舅ご成るが、大抵深い縁かいのう。斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めらるゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片時も早うご連れてきた心ばの、一旦嫁に遣したれば、半七が厭がるならハテ尼にしてなご此内で、御夫婦の亡き後の、香花なりさも取らして下され、コレ手を合して頼みます、訖言が叶はれば、引放されたさ突き詰て、短慮な心も出し居るかさ、案じて、短慮な心も合す、母親は無し唯過して夜のみ合す、母親は無し唯一人、彼女を思ふ儂が因果、此方の縄目も半七が、科人に成つたら猶可愛がる、譬へ又勘當が定ても又離切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親。儂も此方程は無けれども娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴なご人が笑はふ

が儂や可愛い不便でござる。これこれ開入れて給へ半兵衛殿さ、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜々を、たくし掛たる叫び泣き。我強う生れし半兵衛も、舅の心根思ひ遣りか、道理じやく宗岸殿。さ、跡はないぢやくり、妻もお園も一時に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり、半兵衛涙の内よりもお園が顔を打守り、何から何まで氣を付けて孝行にして給る。斯な嫁が尋れたとて、最一人と有る物じや無い、世間の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、其方に別る、半兵衛は、能々不仕合せ、退せさむ無い、返しさむ無い、さは思へども、此方に置けば此儘若後家、儂は夫が可愛い。いさしうおぢやる。夫で訛言聞入れぬ、了簡して

呼戻さぬ。これ嫁女、必ず酷い恨んでばし給んなや。一人の悴はお尋れ者、翌日より誰を力にせうぞ。孝行にして給はつたが、今では結句恨めしいと、せき上げせき入る舅の脊擦るお園も正体なく、伏沈むこそ道理なり。半兵衛漸々顔を上げ、云はればならぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に窒つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん。これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛けて給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰にさ三人は憎々奥へ泣に行く心の中心ぞ哀れなる。跡には園も憂思ひ、かれさてしも鳥羽玉の、世の味氣無さ身一つに、結ばれ解ぬ片絲の、繰返したる獨言、詞今頃は半七様、何處に如何してござらうぞ、今更返ら

ぬ事ながら、私言ふ者無いならば半兵衛さんもお通に免じ、子まで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら、半七様の身持も直り、御勤當も有るまいに、思へば、此園が、去年の秋の煩ひに、寧ろ死んで終ふたら、斯うした難儀は出来まいもの、お氣に入らぬぞ知りながら未練な私が輪廻故、添臥は適はずとも、お側に居度いと辛抱して是まで居たのがお身の仇。今の思ひに比ぶれば、一年前に此園が、死ぬ心がつかなんだ。堪へて給へ半七様、私や此様に思ふてあると、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る憂思ひ。詞翌日はさうから父様に又連れられて天満へ往に、半七様の不圖した果敢ない便りを聞くならば、

思ひ死に死ぬて有る、逆も浮世は立ぬ覺悟嫌はれても夫の内、此家で死ねば後の世の若しや契りの綱にもこそ果期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいぢらし。斯る哀れも知らぬ子の合泣く聲に目や覺ましけん、一間を出て乳飲まう、乳が飲み度いおばくくご、お園も膝に寄添ふ子の顔見て悔り抱き寄せ、詞ヤア其方は美濃屋のお通じや無いか、爰へは如何して在つたご、不審ながらも抱上ぐれば、半兵衛宗岸母親も一間の内を轉び出、詞オーこれく嫁女忝ない其心、障子の内で聞く度に、拜んでばかりゐたはいの。禮云う事も澤山あれご心の急くは此子の事、美濃屋のお通ご云はしやつたは、半七ご三勝の。アイお二人の中に出来た

お通ご云ふは此子じやわいな。ヤアく親父殿聞かしたつたかオ、聞いて居る、其又お通を、ナ、何で捨子にしてト此地へ越した是や理由が有らう、娘懐か何所ぞに、書いた物でな無いか、早う尋ねて見やご言ふ内に、わくせきあくる守袋、内よりはらりと落たる一通取る間運しご封押し切、詞ヤア何ぢや、書置の事ご書いて有る。ヤアくこれく嫁女其方の好い目でちやつご讀りて親子ご成る、父の恩は山よりも高きごの世の教、我身にも辨へ居候へども、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理に擲まれて、心にも有らぬ不孝の罪お赦し下され度候、別て母様の御養育。申しお前の事でござりま

す、能ふお聞き成されませいオ、能ふ聞いてゐますわいの。唄聞いてゐるさの障子より、洩れ出る月ば冴れご胸の闇、合詞エ、時も時ご隣の稽古、然して其跡は、何ご書いて有るぞ、アイ母様の御養育海よりも深き御恵み、親父様御機嫌悪い時には、蔭になり陽になり、幾千萬のお心遣ひも、泡ご消行く我難儀、人を殺せし身ご成り候へば、思ひ設けぬ御別れ。詞ア、夫なら矢張半七様はオノノウ嫁女、善右衛門を殺しましたわいのふ、ハア彼善右衛門ご云ふ奴が、大抵や大概、悪い奴ぢや無いわいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗我子の命を解死人に取らる、ご思へば思へ宗岸殿、口惜いわいのく、無念にごさるご述懐涙見聞くお園は

以前の剃刀、南無阿彌陀佛と覺悟の
 体、これは驚く、母、宗岸叶はぬ手
 にも半兵衛は、漸々押へて、これ嫁
 女、詞老寄りばかりを跡に置き、死な
 うとは胸慾ぢやはい。エ、これ
 が死なずにゐられませうか、放して
 殺して下さい。オ、娘、尤もぢや
 くくわい、ア老少不定の世の中
 こ、聞流したも今身の上、みづく
 こした若い者、義理に迫つて死ぬる
 さは。ノワ半兵衛殿宗岸殿。思ひ廻
 せば廻す程チエ、口惜いわいのく
 唄 鷺鷥の片羽のさばくこ、子
 に迷ひ行く小夜千鳥、無残や半七は
 今宵限りの命ぞ、三勝伴ひしほし
 ほさ心に掛る我子の顔、名残にせめ
 て今一目と、俱に戸口に夜の鶴、内
 には夫と白髪の母、心ならねど書置

を又取上て讀む文章。詞人を殺し一
 日も、生長らへる所存はなく候へど
 も、お通と申す娘一人ござ候て、殊
 にかよべき性質、不便餘る親心、
 夫に心か引かされて、今日まで長へ
 候へども所詮助からぬ身に候へば思
 召も省みずお通を遣はし候ま、私
 の小さく成しと思召され詞どれく
 婆見しやいのくエ、私の小さく成
 しと思召され御養育のお世話の程く
 れん、頼み上候。子を持つて知る親
 の恩ま、お通が不便さいぢらしさに
 お二人様の御恩の程、猶更此身に浸
 み應へ有難存奉候、又々心掛は
 親父殿の御勘當相果候後にても、お
 赦し下され候様、母様宜敷お執成、
 是のみ黄泉の障に御座候々々々、オ
 、道理ちや道理ちやくく可愛や

と泣聲洩るゝ表には、半七も身に應
 へ斯る嘆きも我故と、思ばい今更空
 恐ろしく身を悔んだる男泣、袖や袂
 を嚙締々々、泣く音止むる憂き思ひ
 此方はお園が猶涙、泣々取上ぐる書
 置の、讀むも果敢なき世の中に、詞
 女は其家に在つて定まる夫一人を、
 頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ
 我等がみもち、いつしか愛想らしき
 辭も掛ず、終に一度の添臥も無候へ
 ども、其色目も致さずして、親達大
 事夫大事と、辛抱に辛抱成され候段
 山々嬉しく存じまゐらせ候。今まで
 上げなふ致せし事も、更々嫌ふでは
 無候へども、三勝さばそもじの見え
 ぬ先からの馴染にて、子まで設けし
 中に候へば互に退去も成り難く、夫
 故疎遠に打過まゐらせ候。併し夫婦

は二世と申す事もそふらへば、未來は必ず夫婦にて候々、詞オ、是やまあ誠か半七様、こりや、い娘、未來で夫婦と書いて有るか、いやく、アイく、未來は未來ぢやが、一日なりと此世で女夫にして遣り度い、何としてマア此半七は、善右衛門を殺しましたぞ。どれく娘最少とじやどれおれも讀みませう。兎角不孝の我等に候へども、死後には無やお二人や、宗岸様の御歎き、随分々々力を付け此身に代りて御孝行に成し下されべく候。申し残し度き事どもは數々候へども、涙に字性も見え難く、あらあら惜しき筆止申候只々お通も事の頼上候。此上は亡人後のお念佛、南無阿彌陀佛々々々々々々、讀も終らず宗岸親子、又俯沈め

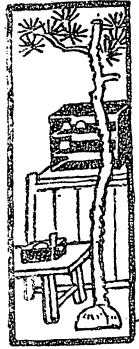
ば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ初孫の顔が見度いさ心に思へど世間の義理で是まで逢も見もせなんだ、斯う言ふ事と知つたらば、顔見ぬ内が増してあつた。愛らし盛りの此お通、半七と一緒に暮すなら能い樂みで有らふ物、これ婆見やいの、あれ何にも知らず手打やあば、はつかりオイノ是や孫よ、モウ父も母も無い程に、此婆と一緒に寝いよ、さはいふ者の乳も無く、今から先の寢起にも、無や歎かん親々、知らずにあるが胸愁者、惨い心いぢらしやま、言ふ聲洩る、三勝が、思ばす乳房を握り締め、詞乳は爰に有る物を飲まして遣たい顔見度い、乳が張るわいのうと、身を慄かせ、駈入らんにも關の戸に空音も成らず羽拔鳥、親は

外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しき迫る内と外、一度にわつと湧き出る、涙浪花江泉川、小きを汲出す如くなり半七は齒を嚙締め斯ばかり深き御情、是非もなや勿体なや、不孝を赦させ給はれ、悔み歎けば三勝も皆成故の御事、俱に詫入る中に半七、詞何時まで泣いても返らぬ繰言親父様の御繩目、早う解くは身の最期、イザく急ぐんサアおちやと立上りしが、今生の別れにせめてお顔をさ差し覗けば三勝も、お通を一目と延上り、見れども親子隔ての關何と千萬無量の想ひ、兩手を合せ伏拜み、合おさらば合く、と云ふ聲も歎きに埋む我家の中見返りく死に行く、身のなる果ぞ哀れなり。半兵衛はつと心付き。詞

此畫置の文体では、今宵最期と決めし半七、宗岸殿も手分して行衛を尋ねん、サア早ふくくく身づくろひ、立出んとする所に、思ひ掛なき表より、詞ヤアく方々、善右衛門を殺せし咎人茜屋半七召捕つたりと呼ばつて庄九郎に繩を掛、立出る宮城十内、詞半七が殺せし今市の善右衛門は、國元にて用金を盗みし盜賊召捕に來りし處、一昨夜半七に殺されし由、則ち善右衛門の同類たる庄九郎を召捕り、彼も白狀にて半七親子に科無しと、立寄つて半兵衛も繩目解けば四人も悦び、夢では無いかと伏拜み、詞これくく親父殿、

十内様のお情で半七が命助かること、のう、何ぞ命の有る中に、止めて下され半兵衛殿と、急るを聞いて十内

が詞半七は死に出たこや、エ、遅かりし残念々々、役目なれば心に任せず、夜明ぬ中に早お行きやれと、十内が花も實もある櫻井の、掟和ぐ國の名も、大和五條の茜染今色上し艶姿共三勝が言の葉を、爰に移して止めけれ。



道行戀の小田卷

お 橋 求
み わ 姫 女
豊竹駒太夫
豊竹和泉太夫
豊竹つばめ太夫
竹本町太夫
豊竹富太夫
豊竹辰太夫
竹本播路太夫

鶴 鶴 鶴
澤 澤 澤
友 友 友
衛 若 平
門 若 平
鶴 鶴 鶴
澤 澤 澤
友 友 友
衛 若 平
門 若 平

切 妹 春 山 婦 女 庭 訓

道行戀の小田卷

御殿へ行くこいふ筋合であります。

この道行は妹春山の四段目奥の次で書下しは明和八年正月で近松半二、三好松洛等の作の一つで、初演の時は春太夫、梶太夫、和太夫等が語つてゐます。この段の模様を申上げます。求女の風雅な姿に戀ひ焦れて入鹿の娘橋姫と杉酒屋の娘お三輪がその後を追ひます。二人して思ふ男を争ひます。求女は腹に一物あり橋姫の裾に緒環の糸をつけ、お三輪はまた求女に緒環の糸を結びます。その戀の緒環をたぐりく三笠山の

常闇の夜々毎に通ひてはまた歸るさの道もせきもせそれも何故戀故にやつるゝ所体はづかしと儂隠す薄衣につゝめど薰り橋姫、思はぬ人を思ひ詫心のたけをくどげどもつれなき松の下紅葉こわれてたへんたまのをも殿故ならば捨草も暫しはいかふ芝村の賤の男が置手拭で忍び忍びの出あいづま晩にござらばナコレのんやほんにさ春戸の柿の木の枝こへて連理を契る言の葉はそれも戀中爰はまた箸中村一も一つの長者も後

人形

鶴澤友太郎

鶴澤友二作

鶴澤重造

里の子 吉田榮三郎

里の子 吉田文二郎

橋姫 吉田光之助

求女 桐竹政龜

娘三輪 吉田文五郎

名にひやく釜口をも出放れてあ
 ゆむにくらきくれ竹のしげれる中を
 分行ば葉毎の露がほろ／＼さほろ／
 うなる雉子の聲思ひくらべていさ
 猶心細野に立つくすにくやかやしに
 おどさるゝわれが姿に又おちてはつ
 さ立行羽風につれてちり／＼ちるや
 柳本流るゝ水に裾ぬれて物思へさや
 帯さげの里羨し自はついに一度
 の情さへないて身をしる涙雨ふるの
 社の御燈の影か松の木の間ちち
 ちと見へつ隠れつ歸るさの後を求女
 がしたひ来て互にはたさ行合の星の
 光りに顔と顔ヤア戀るか何故に爰迄
 後を追鳥はもしや塘の契りをも叶へ

てやるさのお心か胸にはいへど詞
 には面はゆぶりの袖几帳なるほどせ
 つなる心ざし仇に思はじさりながら
 さほどこがるゝ戀路にて晝をば何さ
 うば玉の夜斗りなる通ひ路はいさふ
 しんなり名所を聞いたる上はこなた
 より二世のかためは願ふ事明させ賜
 へまひたすらに問はれて實にも恥か
 しのもつて餘れる憂身の上語るにつ
 らき葛城の嶺の白雲有ぞさもさだか
 ならざる賤の女さ思ふて深い疑ひの
 雲を晴して自も思ひも晴らして賜は
 らばさんな仰も背くまいたさへ草葉
 の露霜さ消ても何のいさやせぬこれ
 程思ふに胸愁なまけぬお前のお心は

餘りむすぶの神様を祈り過したまが
めかやつれなの君やご恨詫思ひ亂る
る薄かげそれとお三輪は走り寄り中
を隔てて立柳立退く秋引こめエ、
聞へませぬ求女様ソリヤ氣の多い悪
性なそもや二人が馴れ初めは始めて
三輪の過し夜に葉ごしの月の俤はお
公家様やら侍様やらしれぬ形ふり
すつきりさ水際の立よい男外の女は
禁制さしめてかためし肌さ肌主ある
人をば大膽な斷りなしに惚るさばど
んな本にもありやせまい女庭訓
方よふ見やしやんせエ嗜なされ女中
様イヤそもじ逆たかちれのゆるせし
中でもないからは戀は仕がちよ我殿

様イヤわたしがイヤわしがごいの
に縫りつ手を取て園に色よく咲草時
は男女になぞらへいは言はれふ物
か夕顔の梅はものゝふ櫻は公家よ山
吹は傾城杜若は女房よいろは似た
りや菖蒲はめかけ牡丹は奥方よ桐は
御主殿姫百合は娘ざかりさなでしこ
のサアなるぞへくなるさならずさ
なら坂や兒手柏の二人の女にらめげ
にらむ萩さ萩中にもたるゝ男へし放
ちばやらじさ縫り付こなたが引ばあ
なたがさやめ戀の柵薦葛付まさはれ
てくるくく廻るや三つの小車の
花よりしらむ横雲のたなびき渡りあ
りく三笠の山も程近く鳴鐘の音

におごろく姫歸る所はいつくぞさ求
女が氣轉振袖の端にぬふてふ取りか
はす縁のおだ巻いさしさの餘つて三
輪も倍氣の針男の裾に付る共しらす
しるしの糸筋をしたひしたふて



平太郎内の段

切 竹本 綴 太夫

豊澤 新左衛門

人形

女房 お柳 吉田 文五郎
 横曾根 平太郎 吉田 榮三
 平太郎の母 吉田 玉七
 悴 緑丸 吉田 文二郎
 和田 四郎 吉田 玉松
 進野 藏人 桐竹 門造
 木遣り 人足 大 ぜい

切 卅三間堂棟由來

平太郎住家の段
 敵討の段

寶曆十年十二月豊竹座上演の『祇園女御九重錦』の三段目がこの柳のお柳の件で『卅三間堂棟由來』の原作になつてゐます。作者は若竹笛躬中村阿契の合作です。織込まれたる内容を申上げますと、白河法皇が御腦を病ひ給ふ原因は院の御前身たる熊野の蓮花房さいふ高僧の觸體が岩田川の水底に沈みそれが岸の柳の根のもこに埋もれてゐるため柳の木が風にそよぐまに御惱になるさいふ神僧のお告げに法皇は直ちに北面の武士横曾根光當に院宣を賜はつて觸體の詮議さ花房王院即ち卅三間堂

建立の用材切り出しを命じ給ひました。ごころが横曾根の同役で腹黒い岩淵時澄は彼を不首尾に陥らせ自ら奉行の役を奪つて熊野へ下りました光當は功成らぬを恥ぢて切腹して果てます。一子平太郎は瀧本の庄司の娘お柳と契つて緑丸と呼ぶ一子を生けました。お柳は實は平太郎に助けられた柳の大木の精の化身であつたのです。卅三間堂の棟の用材にこの柳の大木が切り出される事になり老木は伐り倒され根元から觸體も掘り出れました。木遣り音頭勇ましく曳かれて行く柳の大木がその途中で動かなくなりました。緑丸が音頭を取つて手をかけるさ易々さ曳かれて行つたさいふ草木成佛に絡る親子の恩愛を現はした京は卅三間堂棟の由來

の傳説を叙した名曲で御座ぬます。

(床本) 平太郎住家の段

M 夢やむすぶらん。妻は傍りを立退いて。奥を覗いて立ち戻り、おづおづ傍へ立寄つて、ゆり起せども夫は寢付の高軀。風が持てくる斧の音、伐木さうく〜てう〜と、木を伐音やこたへけん。お柳は身内の苦しみを、じつこらへて立寄れど、得も岩代の結び松、我は柳の縁子が、顔を眺めつまつ置いつ、詞ナ、それよ互に顔を合せては、身の上語るも面はゆし、寢入給ふを幸ひに、今自か云ひ残す、必ず夢と思はずに、白地と聞いてたべ。詞ノリ我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫婦と成る事も一方ならぬ因縁ぞや先の生にて誓たる、契りを結ばん其

の爲に、假に女の姿と變じ、柳も本に待受て、夫婦となりしも、五させの、春や昔の春の頃、詞季仲が鷹狩に、鷹の足絡のかゝりし時、數多の武士に切崩され、既に枯なん此柳、其時に、お前が一矢の手柄、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、あれ〜、又もや爰にちりくる葉は、我を迎ひに来るかさ、思へばやる方詮方、もなく〜見やる足元へ、ちりくる柳の葉隠れや、亂るゝ心押しづめ。詞其時の情の恩、送る月日も重なりて、柳の花のコレ此縁丸、最早今年で五歳の春秋の重なれば、乳がななくも育つべし、成人の後々は、父の弓矢を請傳へ、潔い名を上てたもや、ヤ、母は今を限にて、元の柳に返るぞや、必ず草木成佛と、回向を

頼む夫よ子よ、離れがたなや悲しやと、いふ聲さへも忍び泣き、立つて見、居て見聲を上げて、わつと計りに泣叫ぶ。音に目覺す平太郎、扱は夢さも現さも、聞しは誠で有けるか何ぞ難面くやるべきぞと、抱き留むれば一間より、老母も俱に轉び出で詞様子は聞いたこれお柳、嫁女なうと呼ぶ聲も、ちりくる柳の葉隠れに形ばきへて失にけり。そこよ爰よと母と子が、尋れる音に縁丸。詞か、様ご〜へいかしやつた。か、様なう、なうか、様と、父が後につけ廻り、尋れ迷ふ幼子を、見るに堪ぬか、父親も詞縁も母やい、嫁女なうか、様と、聲をばかりに三人が尋れ廻れば遠にも引かるゝ心執着の、又も姿を現はす有様、ヤアか、様かこ

かけ寄る幼子、夫も涙の聲を上げ。

詞非情の草木と云なむら、情有れば

こそこれ迄に、睦じくも馴なじみ、

一人の若を設し身が、何逆ふり捨て

歸りしぞ、せめては母を見送る迄、

俱に介抱してくれよと、託ち歎けば

漸々に、しほるゝ顔をふり上げて。詞

傳へ聞く安部の童子が母上も、丁度

我身と同じ事、一人の子を残し置き

信田の古栖に歸りしとや。夫は野干

の年経る身、我は元來草木の、歸る

古栖の柳は今、伐崩されて枯柳、歸

るさいふは消ゆる身に、何逆形を残

すべき、哀れも思し給はれよ。詞白

河の法皇の御惱しきり逆、都の使來

たりつゝ、我身を切捨て申す也、もは

や朽木も時を得て、一字の棟と成る

事も、一つは妙なる法の縁、佛果に

連し縁あれば、情の恩を報ぜん爲、

一つの篋を参らすと、平太郎が手

に渡し。詞それこそは、白河の法皇

の前世の御頭也、それを手柄に御身

の上、再び出世をなし給へ、必々縁

が事、お頼み申し参らす。詞エ、

エ、離れがたなや可愛やな。合あ

れく風の音に連れ、柳の糸を切拂

ふ、斧鉞がてうくく、飢は爰

に玉きばる。時にそきたれいざさら

ば、さらばくの聲の下、姿は見え

す成にけり。わつと計りに三人は、

暗より暗に迷ひつゝ、互に手に手を

取りかはし、前後不覺に歎きし、

涙ながらに平太郎我子を膝に抱き上

げ、詞なう母人、我よりは此若も愛

着に引かされて、嘸や名残の惜から

ん、たご姿は見えず共、柳は妻が

亡き佛、今一度此縁に、見せもし、

我も見もしたし、藏人さやらんにも

對面せん、母人には此鬮、佛間へ

直し下さるべし某は今直に俸を連れ

て柳の元へ、チ、夫れく一時も早

う孫を連れて、ハ、ア、然らば直ぐ

さま、サア縁よ來いさ、我子の手を

引き二足三足、深山隠れの山寺の、

入相告ぐる鐘の音。合かぞへながら

もそろく、さぐる足も見付る

母。詞これ平太郎、そなたは何ぞぞ

仕やつたか。これば、様、さ、様は

目が見えぬいのウ。ヤアくそりや

マアいつから。ハイさればで御座り

ます、一月餘り、ふぞ鷄目も發まし

たわ、女房に言ひ含め、是迄はお隠

し申た。エ、聞えぬ平太郎、さうい

ふ事ならさくよりわしにも。ア、コ

レ、何にもお構ひなさるゝな、した
 おまへ様にも此坊めも、今夜から
 嘸便りか。チイノ折も折きてそなた
 の眼病、猶更わしも力むない。ア、
 アレ、アレモアノ雪のふる事わいの
 マア火を燈しませうと行燈の灯を提
 燈に、うつし持つたる縁丸、糞よ笠
 よよ打着せて。詞そんならちよつこ
 参つてさんじましよう。オ、怪我せぬ
 やうに、ソレ縁よ、手を引けよ。あ
 い〜〜。あいろは見ぬぬ鵝目の
 父、杖と我子を力草、柳も本へさた
 どり行く。母は佛間の看經に、鉦も
 幽に六字誥、風も身にしむ黄昏過
 心を鬼の和田四郎、晝の術の兼てよ
 り、夜は山賊の大膽不敵。何でも掘
 出し、こためんこ、大だらし足鏡ひ
 足、ぎしつく疊の物音に、誰じや

〜、詞イヤ大事な盗人じや、ヤ
 アと恠り仕なむらも。詞イヤモウ折
 角遣入らしやつても、見込のない此
 内、了簡して退んで下され。イヤコ
 リヤ婆、おれじや、晝來た者じやが
 見知らぬか。ムウナニ晝來たこいや
 るからは、チ、畑主といふたばアリ
 ヤ嘘じや、山家のさろくに似合ぬ黄
 金十枚は、ハ、よい仕物、まだ臍く
 りが有るで有る、ありたげそこへさ
 らへ出せ、コリヤ命は助けてやるわ
 いやいさ鯉口ならしおごしける。詞
 エ、口惜い、夫さ知つたら其時に、
 やみ〜こばやるまい物、エ、平太
 郎は戻らぬかいの、エ、やかましい
 わい、コリヤ、モウどうですなをで
 は出しをるまい、捜してくれんさか
 け行を、さうはさせぬと取付くを蹴

飛し〜、のつかのか、納戸を引出
 す古葛籠、あたふた開て手にあたる
 親子が着かへに包んだ大小、鮫は鼠
 がまだ外に、御明上た釣なまへ、備
 へし鬮腰を見て恠り、ごこやらぞ、
 髪立退しむ、打點いてコリヤ婆よ、
 葛籠に刀もあるからは浪人に極つた
 が又あの鬮腰は何の爲じや、サアそ
 れぬかせ、チ、あればの、息子が出
 世する大事な物じや。ム、何じや出
 世するか、其出世も猶耳寄じや、是
 や何者の鬮腰じや、サアぬかせ、ぬ
 かさぬかやい、ぬかさにや斯うぢや
 と引抜くだんびら、目の先きへさし
 付くれば。詞アいや〜〜たこへ
 ずた〜に切られても、言はぬ〜
 ヤアしぶさい老ばれぬ、骨をひしい
 で云はするま命もあら繩見付出し、

かんぢぢらみにぐるぐら巻、見上ぐる燈籠の釣繩ほごき、結び付たる猿縛り。詞サア〜ぬかせ〜、こいふては引ける釣繩に、次第にしまる縛り繩、血筋亦らむ薦紅葉、命の憂ぞ危けれ。詞はば、はもむくは〜、情の強い根性から、痛い目を見をるわい、コリヤ下は滑の溜り池氷りの地獄じや、サアぬかせ〜と責せつてう。老母は苦しき聲も出さ降くる雪に争ふ白髪、鹹にしたふ血の涙、見やる向ふに提燈の、光りに拘りなむ三と、繩を放せば眞さか様水の溜りへおちこちの、むざん成ける次第也。遠がの四郎の狼狼眼、表へ逃人も一筋道、やり過して行かんづこ、庵の庭に身を忍ぶ。斯さはしらぬ平太郎案内はいつも我門に、常

燈明の光りさへ、提燈の灯に縁丸。詞これこ、様、佛様へこほした行燈が落ちて有る。ヤアぞれ〜、ホンニこりて落ちて有る、不思議々々々門の口。詞母者人、申し、漸々今歸りました、母者人々々々、コレ〜縁よ、母人は見えぬかあれ〜と、様、ば、様お池へはめて有るわいのヤアと驚き走り寄りさぐり尋ねる手先へ障る繩を力に親子が、漸々にかつき上げ。詞これ〜申し母者人何者が此様に、ば、様なふ〜とこいへご應へもあら悲しや、体は氷も冷切つたり。こりや何させう、どうせうと、かけ出してはかけ戻り、立ちりあたり氣は半亂。詞エ〜、目も明きたい開きたい。鴉目は何の因果ぞと、母に取付き身をもちたへ、聲を

ばかりに嘆きしむ。詞ハツアさうじや、水に溺れし体には、藁を焚いて温むれば、再び息を返すき聞く、チイそれよそれよと父親が、指圖に籤をかき集め、蠟燭の灯を指寄て、心を焦す畑さへ、親子が心通じけん、うごめく体に猶も口寄。詞コレお心髓に、母人様々々々を聲を限りに呼び生る。漸々に目をひらき。詞チ、平太郎、孫もそこにか。ハイ〜縁も爰に居ります。お心が付ましたか、モ何奴が此所爲。チ、何者とは晝來たわつが。扱は街で有つたるよな。シテ〜とつちへうせました。ア、コレ〜平太郎、母が横死は定まる業、随分身をば大切に、曾根の苗氏を起しなば、之れに上越す悦びはない、随分親子長生して末の榮え

を見せたまも、それが冥途の土産でや、取分け不惑は孫の縁、今一度顔を引きよせて、聲を限りのくごき言、可愛いや親には思はぬ別れ、辨へなき子心にもさ、そや便なう思ふで有る、可愛い者やいちらしや、又一つには嫁お柳があい、夫子をふり捨て、歸る柳は切り崩され、魂宙宇をうろくこ、羈に引かれ迷ふで有る、コレ、魂家の棟放れずば、今一度姿を見せたまも、くごき嘆げば平太郎、今日はいかなる悪日ぞ妻に別れ其の上に天にも地にもたつた一人の母人が、非業の別れば何事と悔みの涙はらくく、かゝる憂目を三熊野の、那智のお山の瀧津瀬も一度に落ちくる如くなり。老母は今その聲の下。詞ノウ、平太郎、縁

事を頼むぞやと、いふが親子の一世の別れ、はかなく息は絶えにけり。重る思ひに親子を前後ふかくに嘆きける。様子をさつくこ和田四郎、後に立てせいら笑ひ。詞ハ、いばめばくたばる、爺めは眼がつぶれたな。さう云ふは晝うせた騙よな目前母の仇敵覺悟ひるげさいはせも立てず。コリヤやい、眼も見えぬ様を任せて、じたばたひるげば命もないぞよ、コリヤアノ鬮は出世の種さぬかすから、何者の鬮は有様にぬかせ、ぬかさにやうぬも小伴も、今目前に芋刺じや。ヤぬかしたり、うぬらが手に合ふ某ならず、コリヤく縁よ、刀を奥で取つてくる、此手ちやつと引いてくれ、ヤイく其大小は引さらへ、爰におれが持つ

てある、これが欲しいか、ほしくばサアぬかせ、ぬかさや是じやさひらめく及先、目先は見えぬ眞の闇。恐いく縁丸、逃行く首筋引つかみ詞サア小びつちよからさいなもか但しはぬかすか、サアく何人質取つたる手詰さ手詰、詞エ、此目が明てほしいなア南無権現様々々々々、お柳やい。ヤアやかましいわい、いつその事にこの小伴、芋刺にしてくれんぞ段平逆手にさりなほせば、アレエ、泣く聲に、今はたへ兼ね、詞ア、コレ申ます何を隠さふあの鬮は、白河の法皇のこ半分聞いて。詞ム、よし、つい一言ですむ事を、ソリヤ餓鬼めをこますこ扱やれば、親子が嬉しき、縋り寄り、溜息ほつとく空に。合鳥の羽

首二聲三聲、雲間をさして飛んで行く。其隙に和田四郎、靱鞆を小脇にかい込んで。詞白狀ひろいだ褒美、是をくらへご切り付くる。かい沈んで利腕しつかり、詞コリヤどうじや、いやうぬば眼が見えるかよ。オアレ、蟻の這ふ迄見える不思議。ヤア、切込む刀引つたくり、池の深みへ頭轉倒、尻引からげつゝ立たり。詞ヤア、さゝ様強ふ成つたの。チ、坊さゝ様はもう目が見えるぞよ、嬉しいかく、何より大事な此御頭さ、しつかさ渡す、後の方、這上つたる和田四郎腕をかためて切込む心得、おに、てしつかさ受留め、詞斯う目が明ば百人力、盗人ふぜいの己等に、刀を當るは及の穢れうぬに似合ふた、おの、及先、老母も敵観念せいと、打つてかゝるをはつしと受け、やあ盗人さば案外なり。詞季仲の謀叛に組し、

軍用金を集ん爲、山賊夜盜は假の渡世、鹿島三郎義連なり、猿めらむ命の宿むへ、一そつ首ならべんさ、廣言たらん付入る早足。こなたも弓矢は手練の若者、請けつ流しつ切結ぶ、鎗を削るふゞきの空、みぞれ交りの雨の脚、踏すれば踏留り、組づ轉んづ、三重いごみける、平太郎は多年の試、神や力を添ぬらん。切伏せ、乗つかり、老母が敵うれしやま、親子は体踏み付け、嬉しさ限りなかりける。折からさつさ冷風の身にしみ、さしみ渡り親子は顔をふり上ぐれば影が有らぬか縁の母。詞ノウ平太郎殿、御身多年の孝行、信心の功德に依り、月日の雨眼明らかに、忽ち敵を討たるも、大権現の神勅なり。肌の守を見給へ、いふ聲ばかり聞ゆるにぞ、初めてはつと心付き誠にふしきは此兩眼、眼前敵を討つたるも、偏に神の加護なるか、



茶

大改池橋
建笠

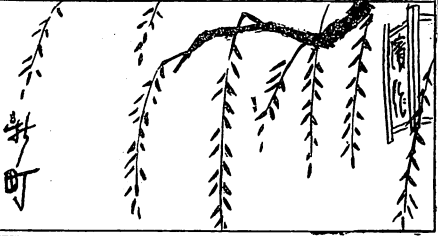
電話新町二番三番

懐中の守りより、牛王取出しよく見れば、
 數多の鳥の影もなく。扱こそ大靈權現の、
 不思議みせしめたまふかや、ハア／＼／＼
 有むたしく／＼と肝にめいする折こそあれ、
 またも羽音は悦び鳥、飛連れ／＼目の邊、
 披きし紙は忽ちに、元の牛王と成にける。
 かゝる奇瑞を三熊野の、牛王の威徳末の世
 に、門戸に押し盗人を、ふせぐ守そ有む
 たき、早東雲の街道筋、木やり囃子で地車
 の、轟く音ぞいさましや、合音頭 和歌の
 浦には名所も御座る、一に權現二に玉津島
 合三に下り松、四に鹽釜よ、ヨイ／＼ヨイ
 トナ。俄に車地に据り、えいや聲して人夫
 共、押せども引げども一寸も先へ行かぬぞ
 ふしぎなる。警固の武士進野藤人さわぐな
 者共思ひ當る事こそ有れ、せくな／＼と制
 する所へ、身拵へして平太郎、縁をつれて
 出迎ひ、詞扱こそ此木の動かぬは、目前親
 子恩愛の、別れをおしむと覺わたり。妻む

靈をもいさめる爲、何卒綱を此俵に、引か
 させて給はなば、有むたからんご願ふにぞ
 詞 伺いさこそ／＼某もさは存する所、左様
 ならば此柳、新宮の濱先迄、跡は海手を流
 さんさ、錦の袋を手に渡し。詞 御頭を是に
 包まれて、跡より登りたまへかし、我は先
 立法皇へ此趣を奏聞せば、曾根の家を引
 起し、父の敵時澄、機をもつて某も宜し
 う手引仕らん、いざ御用意を勸むれば、
 ハアア 忝しご一禮のべ、縁諸共立かゝり
 木やり音頭は父が役、かざす扇子もしほれ
 聲。合音頭 むざんなるかな幼き者は、母
 の柳を都へ送る、合元は熊野の柳の露に、
 育て上たる其縁子が、ヨイ／＼ヨイトナ。
 詞 これやおれがかゝ様か、綱引捨てわつ
 と泣き、縋り歎けば親父は、涙に聲を枯柳
 引げば引かる、恩愛の、孫よくさ夕べま
 で、いさしかつたる老母さへ、道の街に葬
 らんさ、かきいだきたる孝の道。忠義に厚
 き藏人が、いさめて歸る都の土産、柳さ柳

即席御料
 電話新町壹番

新町
 濱



仇討の段

竹本源路太夫

(鶴澤葉太郎市
鶴澤葉太郎市)

人形

横曾根平太郎 吉田榮三

緑丸 吉田文二郎

進野藏人 桐竹門造

仇時澄 吉田玉徳

白河法皇 吉田文之助

の契りたる、連理返りや楊枝村、女夫坂さ
ていひつたふ棟木の由來の、因縁を、語り
傳へていちじるしき。

(床本) 仇討の段

頭風山、平愈寺、蓮花五院、三十三間堂、
事故なく成就し法事の舞樂も納れば法皇御
聲さばやかに、平太郎は何處に有り、参れ
くご御このり、はつこ答へて横曾根親
子衣紋つくるひ立出て、御階の本に畏る
法皇御覽じ只今まごるむ正夢の所は熊野證
誠殿汝親子を召連れて、節分の夜の年籠り
通夜を申さ見し中に、羨しきは汝等親子、
權現直の禮拜は佛意に叶ふ、冥加の我等、
取分て其一子随分大事に守立よ、成人の後
あまれく一向宗門を弘めんその神勅、朕も
病苦を遁れし悦びいよく信心おこたるな
ま、勅定有れば、平太郎コハ不思議なる御
夢かな某も暫し程まごるむ中の夢の告
割符を合せし勅り、此牌が成長まで未然
を察する御示現、是も偏に權現の守らせ賜

御宴會

明のいる感のい

南一温泉料理



四ッ橋

お電話の話用は

南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

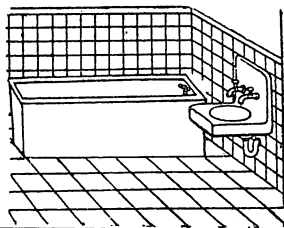
のみさなみ

南一温泉料理

ふ有難きよと親子歡喜を催せり、かゝる折柄進野藏人、庭上に頭を下げ、是なる平太郎當吉、先年時澄の手にかゝりし親にて候次官光政も敵討、何卒御免を蒙り平太郎にも名乗合せ本意を遂させ申度き御願ひにて候こ、奏向有れば、うなづき賜ひ、ハア誠や時澄は謀叛人、季仲に心を合せし事聞及ぶ、平太郎は先祖より忠功厚き其上に、佛智に叶ひし者なれば兎も角も心に任せよ藏人よきに斗ふべしと徳の内、ハ、時澄は某の手の者を遣はせば追付是へ来るべし平太郎殿には御用意有れと、すゝむる嬉しさ、親子共法皇に暇を乞ひ藏人が案内に悦び勇み入れればしづく還御成賜ふ既に用意も辰の刻、北面の武者所矢數の願ひ相叶ひ矢抱に弓を脇挟み的は五寸の角を立射前に直つて始むれば、通り矢、仇矢は藏人の床几にかゝりざい追取、當りくぞ知せの聲、矢數も既に納りける時分を窺ひ平太郎弓矢携へすつと出で、ヤア、時澄は何處

に有る、五年以前熊野において見通し置たる親の敵、横曾根次官が一子同苗當吉尋常に勝負くぞ聲かくれば、ヤア瘦浪人も鏢矢を以て敵討は腹の皮一筋残つた乙矢を以て胴腹を射ぬいてくれんぞ弓に矢はげてつゝいたり、こなたもこより弓矢の家一と矢にたい中いぬかんと同じく矢はげて、立向ふ、御堂の影より練丸刀持手もかいしく、ねらひ固めし時澄が弦をばつしと切拂へばコハ何奴と狼狽眼可取直す其隙に飛くる矢坪は時澄も胸板朱に射通されどふと轉ぶを起も立す親子一度に立ちかゝり父の敵ちい様の敵、覺たかささめを刺しにも平太郎親子天にも上る心地なり、藏人勇んで出来た、此由院へ奏向せば彌々御感ましますさん、いざ同道と打連て院参急ぐ横曾根の家の榮へや洛陽の三十三間御堂の矢數、是を始めて今の世まで通り矢數當りの矢數、萬々歳の粒かけて納る矢こそめでたけれ。

化粧多イ
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町一六六九
二二七六
阪急 夙川
岡部商會支店
電話西區一九七六

四ツ橋畔

よ 九月の文樂座
り 消息日誌

△九月一日

新涼九月興行の初日開場。

十六年振で鶴澤綱造舞臺の人となり紋下津大夫の合三味線を勤む。

△九月三日

大阪府督學課の幹旋で府下小學校女教員連の講習會員六十餘名が打連れて鑑賞會を催されました。

△九月十四日

文樂會を今月に限り綱造後援會として大いに氣勢を添え一入の盛會を呈しました

△九月十五日

恒例で毎月觀賞會を催されてゐる明治生命保險大阪支店の方々も文樂座御宴會を開催されました。

△九月十七日

阿部師團長閣下は幕僚連打連れられ和服姿にのんびりと趣味の半日を過された。樋口次郎の逆櫓なごいたく興を覺えられたやうに見えました。

△九月十九日

大阪電報通信社の幹旋で『したしみ會』の御婦人方がお連れ合され興樂の秋の半日を愉快にお過しでした。

△九月二十日

新秋九月興行も皆様の絶大なる支持と聲援の裡に打上げました。

追記

九月一日初日で東京帝劇へ進出しました。

主なる顔振れば

古靱(清六) 鏝(新左衛門) 駒(重造)

つばめ(仙糸) 和泉、嶋。

人形は文五郎に玉松、小兵吉其他。

現代的

廣告は廣告社に限り

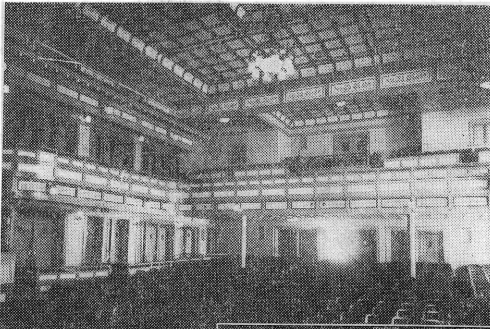


齋部徳太郎經理營

大阪府南区御跡町九

電話戒三七五六番

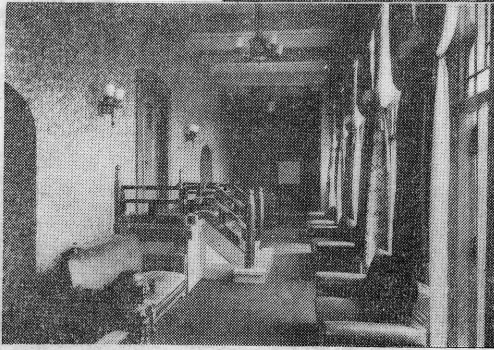
四ツ橋
文樂座
グランド
ラフ



お望を臺舞りよ席覽觀



景全觀外座樂文



口入御席別特と所憩休面正階二

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)		夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
		平日	土曜	日曜 祭	晝	夜
文樂座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓	
		土曜	80圓	110圓	170圓	
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓	

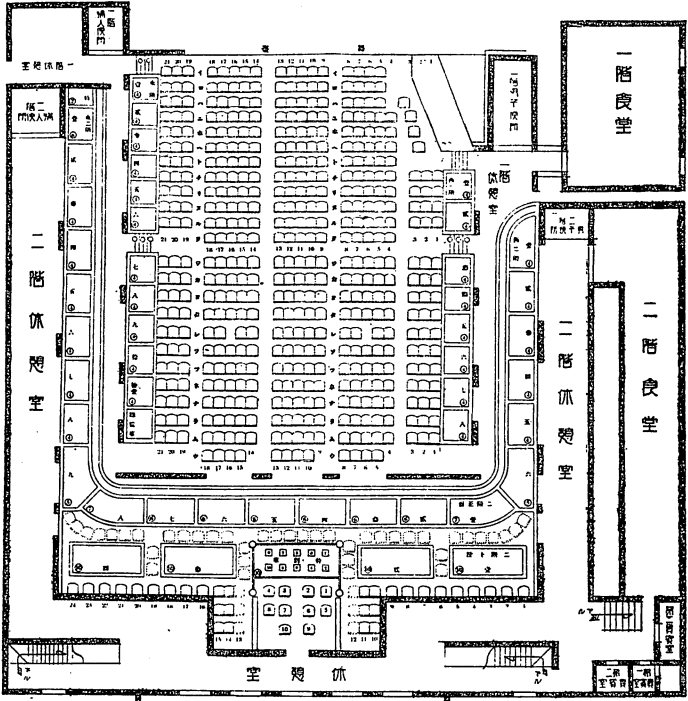
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アブライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
ス ポ ッ ト	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンパー		1枚1回 1圓
大 衝 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラゲエータ使用料		無料

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。
 前賣切符壹等お座席・壹等椅
 子席のお切符は五日前から發
 賣致します、また五日以後の
 お切符も壹等席に限り御豫約
 申し上げますから上圖の座席
 表に依つてお早く御望みの御
 席席をお申し込みになればお
 心のまゝにお好きな處が御自
 由にされます御用命の節お呼
 出しの電話は
 南四七一一番で御座ります
 ・切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります。
 二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します。
 尚多人數様お團體様のお申込
 も御相談いたします。

文樂座食堂御案内



洋食堂
(西館階上)

- スピード・アイナー (御定食) 一、五〇
- フライ(海老、魚) 四、〇〇
- ガム・レツ 四、〇〇
- コロツケ 四、〇〇
- ビーフカツレツ 四、〇〇
- チキンカツレツ 四、〇〇
- ビーフステーキ(五分間) 四、〇〇
- カレーライス 三、五〇
- チキンライス 三、五〇
- コールドチキン 五、五〇
- コールドハム 五、五〇
- コールドビーフ 五、五〇
- マカロニーチース 五、五〇
- アスパラガス 四、〇〇
- サンドウイツチ 四、〇〇
- ソーダ水(特製) 二、〇〇
- 文楽スベツシアル 〇、〇〇
- ビーフステーキ 〇、〇〇

時、四、五〇
一、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇



和食堂
(西館階下)

- 吸付辨當 二、〇〇
- 御食事(五品御飯香物) 〇、〇〇
- 親子丼 五、五〇
- 親し壽司 五、五〇
- ちぎら壽司 五、五〇
- 雀し壽司 五、五〇
- 鐵火巻 五、五〇
- 赤だ巻 五、五〇
- お吸物 三、五〇
- 菊正宗 三、五〇
- 特アサヒビール 五、五〇
- ダイヤレモン 三、五〇
- ソーダ水(普通) 一、〇〇
- 紅茶 一、〇〇
- アイスクリーム 二、〇〇
- クキム 〇、〇〇

二、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇
〇、〇〇



洋酒
お茶

酒場 (西館階上)

- 文楽カクテル 六、七〇
- マンハツタンカクテル 七、〇〇
- ドライマテニイ 九、〇〇
- アブサンフラツペ 七、〇〇
- ミリオンダラー 七、〇〇
- ミリオネア 七、〇〇
- ウイスキー 七、〇〇
- コニヤツク 七、〇〇
- リキユール 七、〇〇
- チービスケツト 七、〇〇
- ソーダ水 七、〇〇

南一温泉料理
經營

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前デモ御使用中デモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセマ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出デアレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用ヲ必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用ヲ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
- 既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセマ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

◇ 文樂座御ひるき名簿募集 ◇

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ッ橋 文樂座編輯部宛の事。

フランス語に譯された

『文樂人形芝居の研究』 一部特價 金一圓八十錢

宮嶋綱男氏著 寫眞版數十個挿入

人形種類圖と文樂座發達の歴史が全部判る唯一の文獻

『文樂今昔譚』 一部特價 金二圓

木谷蓬吟氏著

美しいグラフィックと興味溢る、好讀物月刊雑誌の

『道頓堀』 一部 金三十錢

御休憩は

バルコニー
露臺遊歩場を御利用下さい。

食堂二階より御自由にお昇り下さいまし。

蒸しタオルの設備が御座あります

一階西側の大休憩所に御座います
どなた様でも御自由におつかい下さい。高雅な香りの資生堂ローションを使用してゐます。

お土産に

お知合への通信用に

文樂木版手摺繪葉書

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある

齋藤清二郎氏の作品です

毎月發行 三枚一組美麗なる包裝

一部 金五十錢

額面用のものも 三部一組別包裝

毎月發行 一部 金壹圓

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食バー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一帯前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗は

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處で御願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お持席お立ちのこきは御携帶願ひます。

お席券は

各自に御持ち下さい。切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお持席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種備物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所を新設しましたから御使用下さい。

御休憩の間は

四ツ橋

文樂座

前賣切符専用電話南四七一二番
電話南 七四〇八番
三七八八番

昭和六年十月二日印刷
昭和六年十月三日發行

大阪・四ッ橋・文樂座
編輯兼 大塚 良三

大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷者 永井太三郎

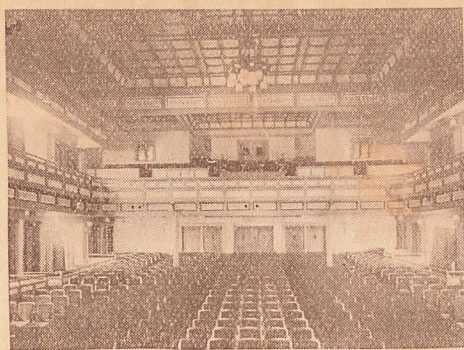
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

經濟的な

大阪の宴會劇場

「文樂座の御宴會」を

御利用下さい。



金 四 圓 也 (御一人様)

御場席は……一等指定椅子席
お食事は……皆様本位の定食
お寫眞は……お揃ひの記念撮影
番 附……床本と總配役付

お申込は 二十人様以上を承はります。

お寫眞は 終演と同時に所持歸り出来る様速成いたします。

お申込は お場席其他の準備の都合上五日前にお願ひ致します

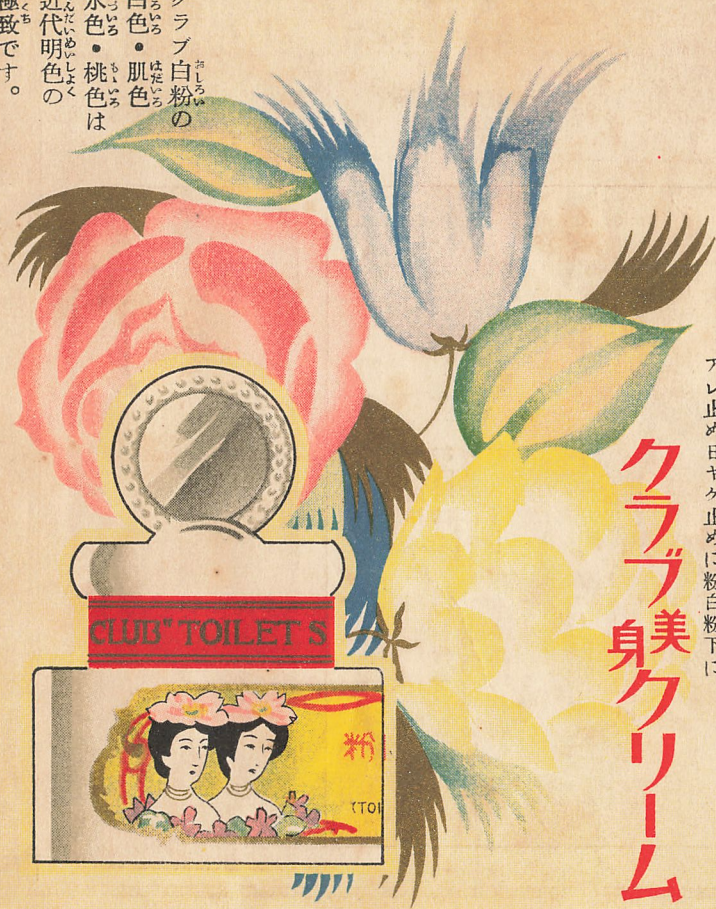
お申込は 文樂座事務室へお願致します。

お電話は 南四七一・三七八八・七四〇八番

二酸化チタニウム配合

クブラブ白粉

クラブ白粉の
白色・肌色
水色・桃色は
近代明色の
極致です。



ア
レ
止
め
日
ヤ
ケ
止
め
に
粉
白
粉
下
に

ク
ラ
ブ
美
身
ク
リ
ー
ム